



# 京都大学 交換留学海外派遣報告書

平成 25 年度 京都大学 国際交流推進機構

Kyoto University  
Overseas Exchange Program Placement Report



# 目次

## Contents

### 巻頭言

|                         |   |
|-------------------------|---|
| 京都大学の国際戦略と派遣留学の意義 ..... | 1 |
|-------------------------|---|

## 第1章 京都大学の交換留学の歴史・現状・展望

|                       |   |
|-----------------------|---|
| 1. 派遣留学（交換留学とは） ..... | 5 |
| 2. 交換留学の歴史 .....      | 6 |
| 3. 新しい取り組み .....      | 9 |

## 第2章 平成24年度 派遣学生の感想

### I 大学学部編

| 名 前        | 学 部                   | 留学先国    | 大 学         | 期 間                                    | ページ |
|------------|-----------------------|---------|-------------|----------------------------------------|-----|
| 高橋 佑吉      | 経済学部<br>経済経営学科 4回生    | 中華人民共和国 | 香港大学        | 平成 25 年1月 14 日～<br>平成 25 年6月 25 日      | 13  |
| 酒井 航二郎     | 経済学部<br>経済学科 4回生      | 中華人民共和国 | 香港大学        | 平成 25 年 9 月～<br>平成 25 年 12 月           | 16  |
| 中村 優士      | 教育学部<br>教育科学科 3回生     | 中華人民共和国 | 香港中文大学      | 平成 25 年1月8日～<br>平成 25 年5月 23 日         | 18  |
| 松永 万実      | 法学部4年生（5回生）           | 中華人民共和国 | 香港中文大学      | 平成 24 年9月1日～<br>平成 25 年5月 20 日         | 20  |
| 宮本 知佳      | 経済学部<br>経営学科 4回生      | 大韓民国    | 高麗大学        | 平成 24 年8月 29 日～<br>平成 25 年1月 31 日      | 22  |
| 若松 美歩      | 経済学部<br>経済経営学科3年      | 大韓民国    | 延世大学校       | 平成 25 年2月 21 日～<br>平成 25 年 12 月 21 日   | 23  |
| 久保田 聖良     | 経済学部<br>経済経営学科 4回生    | タイ      | チュロンコーン大学   | 平成 25 年 8 月 10 日～<br>平成 25 年 12 月 30 日 | 25  |
| 中村 亘       | 経済学部<br>経済経営学科 4回生    | イスラエル   | テルアビブ大学     | 平成 24 年 10 月 15 日～<br>平成 25 年1月3日      | 30  |
| 元根 啓佑      | 農学部<br>応用生命科学科 4回生    | オーストラリア | メルボルン大学     | 平成 25 年7月 20 日～<br>平成 25 年 12 月1日      | 33  |
| 中島 聖       | 公共政策教育部<br>公共政策専攻 3回生 | オーストラリア | オーストラリア国立大学 | 平成 24 年7月 16 日～<br>平成 24 年 11 月 24 日   | 35  |
| シンバンニティパット | 法学部 3回生               | フランス    | ストラスブール大学   | 平成 23 年9月1日～<br>平成 24 年6月 30 日         | 37  |
| 富澤 由佳      | 経済学部<br>経済経営学科 4回生    | フランス    | ストラスブール大学   | 平成 24 年9月 13 日～<br>平成 25 年6月 30 日      | 39  |
| 小島 康平      | 法学部 4回生               | フランス    | 国立パリ政治学院    | 平成 24 年8月 20 日～<br>平成 25 年5月1日         | 41  |
| 岡田 悠季      | 法学部 3回生               | フランス    | パリ政治学院      | 平成 24 年8月～<br>平成 25 年5月                | 43  |
| 村井 香菜      | 法学部 4回生               | ドイツ     | ボン大学        | 平成 24 年9月3日～<br>平成 25 年7月 31 日         | 46  |

| 名 前    | 学 部                 | 留学先国   | 大 学       | 期 間                               | ページ |
|--------|---------------------|--------|-----------|-----------------------------------|-----|
| 森岡 みづほ | 法学部 4回生             | オランダ   | ライデン大学    | 平成 25 年1月 12 日～<br>平成 25 年8月 12 日 | 49  |
| 大河原 誠也 | 法学部 2回生             | スウェーデン | ウプサラ大学    | 平成 25 年1月 21 日～<br>平成 25 年6月 1日   | 51  |
| 財津 浩之  | 法学部 4回生             | スイス    | ローザンヌ大学   | 平成 24 年9月 18 日～<br>平成 25 年5月 31 日 | 53  |
| 鈴木 舞   | 経済学部<br>経済経営学科 3回生  | カナダ    | マギル大学     | 平成 24 年9月 1日～<br>平成 25 年4月 30 日   | 54  |
| 西岡 かれん | 文学部<br>アメリカ文学専攻 4回生 | カナダ    | マギル大学     | 平成 24 年9月 1日～<br>平成 25 年4月 30 日   | 56  |
| 四方 純   | 理学部<br>生物専攻 4回生     | カナダ    | コンコルディア大学 | 平成 24 年9月 4日～<br>平成 25 年4月 30 日   | 60  |
| 和田 沙紀子 | 農学部<br>食料環境経済学科 4回生 | カナダ    | ウォータールー大学 | 平成 25 年4月 29 日～<br>平成 25 年9月 6日   | 63  |

## Ⅱ 大学院編

| 名 前   | 学 部                                  | 留学先国    | 大 学        | 期 間                             | ページ |
|-------|--------------------------------------|---------|------------|---------------------------------|-----|
| 藤井 隆宏 | 人間 環境学研究科<br>共生文明学専攻修士 2年            | 中華人民共和国 | 浙江大学       | 平成 24 年9月 1日～<br>平成 25 年6月 30 日 | 72  |
| 神山 侑衣 | 文学部 人文学科<br>歴史基礎文化学系<br>日本史学専修 3年    | シンガポール  | シンガポール国立大学 | 平成 25 年1月 7日～<br>平成 25 年5月 16 日 | 74  |
| 中岡 翔子 | 人間環境学研究科共生<br>人間学専攻博士後期3<br>年        | ドイツ     | ミュンヘン大学    | 平成 24 年9月 1日～<br>平成 25 年8月 31 日 | 78  |
| 浅井 佑太 | 文学研究科<br>美学美術史学 2回生                  | ドイツ     | ハイデルベルク大学  | 平成 24 年9月 1日～<br>平成 25 年9月 2日   | 79  |
| 川野 夏実 | 人間・環境学研究科 共生人<br>間学専攻 言語科学講座修士<br>2回 | オランダ    | ライデン大学     | 平成 24 年9月 1日～<br>平成 25 年6月 30 日 | 81  |
| 谷澤 亮也 | 情報学 研究科<br>社会情報学 1回生                 | メキシコ    | グアダラハラ大学   | 平成 24 年8月 15 日～<br>平成 25 年1月 7日 | 83  |

## 京都大学の国際戦略と派遣留学の意義

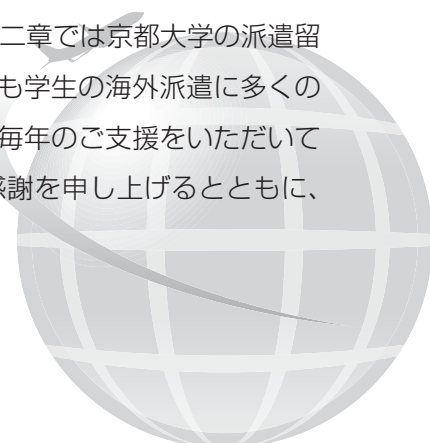
国際交流推進機構長 森 純一

京都大学では平成 25 年に京都大学の国際戦略を取りまとめ、その内容を冊子にまとめるとともに、ウェブサイト等にも掲載を行った。この国際戦略は「2x by 2020」と命名された。2x by 2020 はダブル・バイ・トウェンティ・トウェンティと読む。京都大学が世界に冠たる大学であるためにその国際指標を 2020 年までに倍増していくという極めて具体的な目標を設定している。京都大学がこれまで培ってきた伝統、すなわち伝統、文化の蓄積、独創力をもとに、研究、教育、国際貢献の 3 つの分野で、それぞれに達成すべき目標を定め、そして将来像を描き出したものである。発表以来、学内でもよくその考え方が浸透し、また外部からも様々な問い合わせや称賛を頂いている。

この国際戦略の教育の分野において、もっとも重要なことの 하나가学生の海外経験を増やすことである。グローバル化が社会の様々な分野に浸透し、今や国際という言葉がどのような部門においても当たり前になりつつある。かつては世界の動向を決めるのは限られた先進国だけであったが、今や BRICS などの新興国の動向が世界を左右し、政治や経済はもちろん学問の分野においても強力な国際競争が展開されている。このような時代において、2x by 2020 でも、京都大学の教育は、国際的に通用し将来の世界を牽引できるリーダー達を育てることを目標としている。このためには多くの学生の海外派遣を実施し、海外を肌で感じ、異文化を理解し、かつ自己主張や情報発信を自由にできる人材の養成がなんとしても必要である。

学生の海外派遣の中核的な役割を果たすものが、海外提携大学への派遣留学生の派遣であり、海外からの派遣留学生の受け入れである。派遣留学は簡単に交換留学とも呼ぶ。海外の一流提携大学との間に学生の派遣受入についての契約書、「学生交流協定」を結び、それに基づいて、通常は 1 セメスターあるいは 2 セメスターを派遣し、提携先の学生と同様の条件で授業を受ける。その成果である単位は、帰国後、正式の単位として認定される。派遣された学生は多くの場合、目を輝かせてその体験を語ってくれるものである。

この報告書は第 1 章に京都大学の交換留学派遣の現状、そして第二章では京都大学の派遣留学によって派遣された学生の感想を中心としてまとめた。これまでも学生の海外派遣に多くのご支援をいただいた方々に感謝を申し上げます。特に京大財団からは毎年のご支援をいただいております。これら学生の渡航を支援することができた。ここに改めて感謝を申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願いするものである。





# 第1章

## 京都大学の交換留学の歴史・現状・展望

---





## 1. 派遣留学（交換留学）とは

現在の大学教育において、もっとも重要なことのひとつが学生の海外経験を積ませ、グローバルな人材を育てることである。

この教育の中核的な役割を果たすものが、海外提携大学へ留学生の派遣であり、海外提携大学からの留学生の受入である。このような双方向の派遣留学は簡単に交換留学とも呼ばれている。これは海外提携大学への一方的な派遣ではなく、学生の派遣に当たっては親元大学として海外提携大学からの学生の受入の義務も負うからである。ここでは学生の派遣先である海外提携大学を派遣先大学、学生を派遣する大学を親元大学と便宜的に呼ぶこととする。

交換留学を実施する大学は海外提携大学との間に学生の派遣受入についての契約書、「学生交流協定」を結ぶ。「学生交流協定」には派遣および受入の双方向の義務が定められている。通常は年間にそれぞれ2から5名程度の学生を派遣できることとしており、逆に同数の人数の学生を受け入れなければならない。

通常は1セメスターあるいは2セメスターの期間、派遣し、提携先の学生と同様の条件で授業を受ける。学生は受講した授業について、派遣先大学において単位を取得するが、当該単位は、帰国後、多くの場合、親元大学の正式の単位として認定される。これを単位互換と呼ぶ。

交換留学の学生にとってのメリットは大きく3つの点がある。

### ①派遣先大学の学生と同じ条件で授業が受けられる

「学生交流協定」は派遣された学生が派遣先大学の学生と同じように授業が受けられるようにすることを定めている。また多くの大学は交換留学の受入学生に宿舍の優先配分を行っており、生活面でのメリットも大きい。

### ②留年しないで海外留学が可能となる

学生は取得してきた派遣先大学の単位を親元大学の単位として認められることにより、留学期間、親元大学に居ないままで、卒業に十分な単位を揃えることができ、留年しないで留学することが可能となる。

### ③派遣先大学の学費が免除される

交換留学はまた「学生交流協定」に基いて派遣先大学の授業料は免除されるので、親元大学の授業料のみを支払えばよいことになる。英米圏の大学では授業料が高いことが多く、学生にとって大きなメリットとなる。

交換留学は世界中の大学で学生の海外派遣のもっとも重要な手段となっている。派遣人数も大きなものとなっており、アジアでもっとも積極的に学生派遣受入を行っているシンガポール国立大学は年間に学部生の派遣と受入がそれぞれ1,800人となっている。

以下に京都大学の交換留学制度の歴史、そして現状、さらに今後の展望を述べる。



## 2. 交換留学の歴史

京都大学の交換留学制度は 1997 年 10 月に遡る。京都大学創立 100 周年を記念し、交換留学制度が設立された。海外大学からの派遣学生の受入のために「京都大学国際教育プログラム (KUINEP)」を創設した。設置後、本学からの受入および派遣は長年に亘り、それぞれ 20 名程度に留まっており、派遣留学学生数の増加には長い期間を要した。ようやく 2010 年になって派遣学生数の顕著な増加が見られるようになった。

### 2. 京都大学からの交換留学

#### (1) 大学間学生交流協定による京都大学からの交換留学生の推移

京都大学からの派遣学生数は、2002（平成 14）年度以降、30～50 人の間で概ね横ばいに推移していたが、2010（平成 22）年度からの 4 年間は増加傾向にある。2010（平成 22 年度の派遣数は 48 名で、2011（平成 23）年度は 67 名、2012（平成 24）年度は 79 名、2013（平成 25）年度は 88 名となっている。（図表 1）。

図表 1 交換留学派遣学生数推移（国別）

|       | 国名       | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 |
|-------|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 北米    | アメリカ     | 6    | 8    | 7    | 2    | 3    | 5    | 4    | 5    | 4    | 5    | 4    | 6    |
|       | カナダ      | 0    | 7    | 6    | 7    | 4    | 4    | 11   | 12   | 7    | 8    | 7    | 8    |
| 中南米   | メキシコ     | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 2    | 0    | 0    | 0    | 2    | 2    |
| 欧州    | イギリス     | 0    | 0    | 0    | 0    | 2    | 0    | 3    | 3    | 6    | 9    | 3    | 10   |
|       | オーストリア   | 2    | 0    | 0    | 2    | 2    | 1    | 1    | 1    | 0    | 0    | 2    | 1    |
|       | オランダ     | 2    | 3    | 2    | 5    | 5    | 4    | 4    | 2    | 6    | 4    | 5    | 5    |
|       | スイス      | 0    | 0    | 1    | 1    | 2    | 2    | 1    | 1    | 3    | 2    | 3    | 1    |
|       | スウェーデン   | 2    | 4    | 2    | 4    | 2    | 3    | 4    | 2    | 4    | 10   | 1    | 6    |
|       | デンマーク    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    |
|       | ドイツ      | 6    | 5    | 5    | 4    | 3    | 5    | 2    | 1    | 3    | 7    | 6    | 10   |
|       | ノルウェー    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    |
|       | フィンランド   | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 1    |
|       | フランス     | 8    | 6    | 6    | 7    | 9    | 8    | 9    | 6    | 4    | 8    | 10   | 7    |
|       | ベルギー     | 2    | 1    | 0    | 1    | 0    | 2    | 0    | 0    | 1    | 1    | 1    | 1    |
|       | ロシア      | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    |
| 中東    | イスラエル    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 1    | 0    | 0    | 0    | 1    | 2    |
|       | トルコ      | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 3    |
| オセアニア | オーストラリア  | 3    | 3    | 1    | 1    | 3    | 1    | 2    | 0    | 1    | 2    | 8    | 5    |
|       | ニュージーランド | 0    | 1    | 0    | 1    | 1    | 0    | 1    | 0    | 1    | 0    | 3    | 1    |
| アジア   | シンガポール   | 0    | 0    | 1    | 1    | 2    | 0    | 0    | 2    | 1    | 3    | 2    | 1    |
|       | タイ       | 0    | 1    | 0    | 1    | 0    | 2    | 1    | 0    | 1    | 1    | 3    | 1    |
|       | 韓国       | 1    | 3    | 1    | 1    | 1    | 0    | 3    | 0    | 0    | 2    | 3    | 0    |
|       | 台湾       | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 1    | 2    | 1    | 2    | 1    | 2    | 3    |
|       | 中国       | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 1    | 1    | 1    | 4    | 4    | 13   | 14   |
|       | 合計       | 32   | 42   | 32   | 38   | 39   | 39   | 52   | 37   | 48   | 67   | 79   | 88   |

出所：2002～2003：京大概要より、2004～2013：留学生課データより

2010（平成 22）年に英国学生ビザに関する新しいルールが導入され、英語運用能力テストの一定の基準が求められるなどが影響し、一時的な減少が見られる。

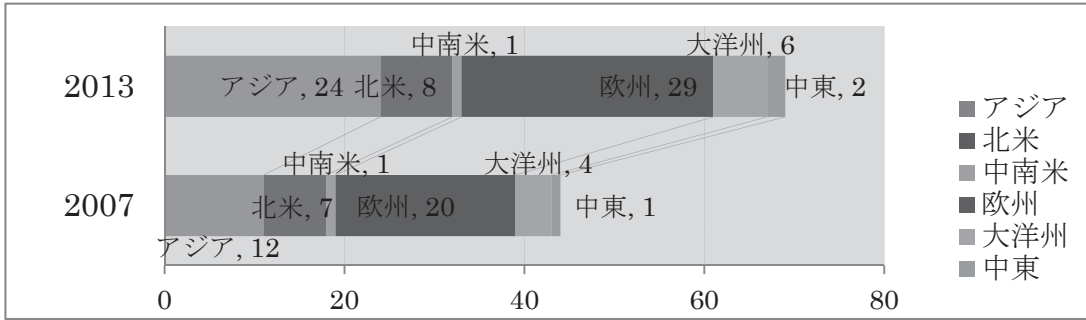
交換プログラムというまでもなく、協定大学間での相互的な学生交流を目的としているが、特に 2009（平成 21）年度までは、アジア圏の大学、特に中国と韓国は受入れ過多の状態、すなわちアジアへの交換留学による派遣数が伸び悩んでいる状態にあった。2012（平成 24）年度には後述する短期留学プログラム開設の効果もあって、改善の兆しがみられる。

## （2）大学間学術交流協定・学生交流協定

既に述べたように、交換留学による派遣のためには海外提携大学との「学生交流協定」の締結が必要である。本学の協定校数は 2007 年まで限定されたものであり、十分に学生のニーズをとらえたものとは言い難いものであったが、2008 年以降、積極的に学生の広範なニーズに応えるべくその数を増やしている。

大学間学術交流協定は 2007（平成 19）年度の 83 大学 3 大学群から 2013（平成 25）年度には 94 大学 4 大学群 1 機関、学生交流協定締結先大学は 53 大学 2 大学群から 68 大学 2 大学群となった（図表 2 及び 3）。これにより全学の国際交流と学生派遣が一段と進んだ。

図表 2 本学の学生交流協定締結校数推移



図表 3 大学間学生交流協定校数（2013 年度 3 月現在） 学生数は派遣可能枠

| 国・地域    | 協定数 | 学生数 | 国・地域     | 協定数 | 学生数 |
|---------|-----|-----|----------|-----|-----|
| 欧州      |     |     | 北米       |     |     |
| 英国      | 8   | 15  | アメリカ合衆国  | 5   | 10  |
| オーストラリア | 1   | 2   | カナダ      | 3   | 14  |
| オランダ    | 2   | 5   | アジア      |     |     |
| スイス     | 1   | 2   | 韓国       | 5   | 12  |
| スウェーデン  | 3   | 6   | シンガポール   | 1   | 2   |
| ドイツ     | 8   | 22  | タイ       | 3   | 6   |
| フランス    | 4   | 13  | 台湾       | 2   | 6   |
| ベルギー    | 1   | 2   | 中国       | 9   | 21  |
| フィンランド  | 1   | 2   | ベトナム     | 1   | 5   |
| 中東      |     |     | 香港       | 3   | 6   |
| イスラエル   | 1   | 2   | オアセニア    |     |     |
| トルコ     | 1   | 2   | オーストラリア  | 5   | 11  |
| 南米      |     |     | ニュージーランド | 1   | 2   |
| メキシコ    | 1   | 2   | 合計       | 70  | 170 |

図表 4 は国別の交換留学派遣率の推移である。派遣枠数に対する派遣実数の比率は、英語圏（アメリカ、イギリス、カナダ）、また交換留学の必要言語を英語としている国（オランダ、スウェーデン、シンガポール、香港）で高くなっている。英語圏でもオーストラリア、ニュージーランドへの派遣率が低いのは、学期の違いが留学を難しくしていることが考えられる。

図表 4 交換留学派遣率の推移（国別）：2010～2013 年

|          | 2010 |      |      | 2011 |      |      | 2012 |      |      | 2013 |      |      |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|          | 派遣枠数 | 派遣実数 | 派遣率  | 派遣枠数 | 派遣実数 | 派遣率  | 派遣枠数 | 派遣実数 | 派遣率  | 派遣枠数 | 派遣実数 | 派遣率  |
| アメリカ     | 6    | 4    | 67%  | 6    | 5    | 83%  | 10   | 4    | 40%  | 10   | 6    | 60%  |
| カナダ      | 13   | 7    | 54%  | 13   | 8    | 62%  | 14   | 7    | 50%  | 14   | 8    | 57%  |
| メキシコ     | 2    | 0    | 0%   | 2    | 0    | 0%   | 2    | 2    | 100% | 2    | 2    | 100% |
| オーストラリア  | 9    | 1    | 11%  | 9    | 2    | 22%  | 11   | 8    | 73%  | 11   | 5    | 45%  |
| ニュージーランド | 2    | 0    | 0%   | 2    | 0    | 0%   | 2    | 3    | 150% | 2    | 1    | 50%  |
| イギリス     | 5    | 6    | 120% | 5    | 9    | 180% | 15   | 3    | 20%  | 15   | 10   | 67%  |
| オーストリア   | 2    | 0    | 0%   | 2    | 0    | 0%   | 2    | 2    | 100% | 2    | 1    | 50%  |
| オランダ     | 5    | 6    | 120% | 5    | 4    | 80%  | 5    | 5    | 100% | 5    | 5    | 100% |
| スイス      | 4    | 3    | 75%  | 4    | 2    | 50%  | 2    | 3    | 150% | 2    | 1    | 50%  |
| スウェーデン   | 6    | 4    | 67%  | 6    | 10   | 167% | 6    | 1    | 17%  | 6    | 6    | 100% |
| ドイツ      | 14   | 3    | 21%  | 17   | 7    | 41%  | 20   | 6    | 30%  | 22   | 10   | 45%  |
| フィンランド   |      |      |      | 2    | 0    | 0%   | 2    | 0    | 0%   | 2    | 1    | 50%  |
| フランス     | 13   | 5    | 38%  | 13   | 8    | 62%  | 15   | 10   | 67%  | 15   | 7    | 47%  |
| ベルギー     | 2    | 1    | 50%  | 2    | 1    | 50%  | 2    | 1    | 50%  | 2    | 1    | 50%  |
| イスラエル    | 2    | 0    | 0%   | 2    | 0    | 0%   | 2    | 1    | 50%  | 2    | 2    | 100% |
| トルコ      |      |      |      |      |      |      |      |      |      | 2    | 3    | 150% |
| 韓国       | 12   | 0    | 0%   | 12   | 2    | 17%  | 12   | 3    | 25%  | 12   | 0    | 0%   |
| シンガポール   | 2    | 1    | 50%  | 2    | 3    | 150% | 2    | 2    | 100% | 2    | 1    | 50%  |
| タイ       | 6    | 1    | 17%  | 6    | 1    | 17%  | 6    | 3    | 50%  | 6    | 1    | 17%  |
| ベトナム     |      |      |      |      |      |      | 5    | 0    | 0%   | 5    | 0    | 0%   |
| 中国       | 14   | 2    | 14%  | 18   | 0    | 0%   | 21   | 7    | 33%  | 21   | 11   | 52%  |
| 香港       | 6    | 2    | 33%  | 6    | 4    | 67%  | 6    | 6    | 100% | 6    | 3    | 50%  |
| 台湾       | 4    | 2    | 50%  | 4    | 1    | 25%  | 4    | 2    | 50%  | 6    | 3    | 50%  |
| 合計       | 129  | 48   | 37%  | 138  | 67   | 49%  | 166  | 79   | 48%  | 172  | 88   | 51%  |

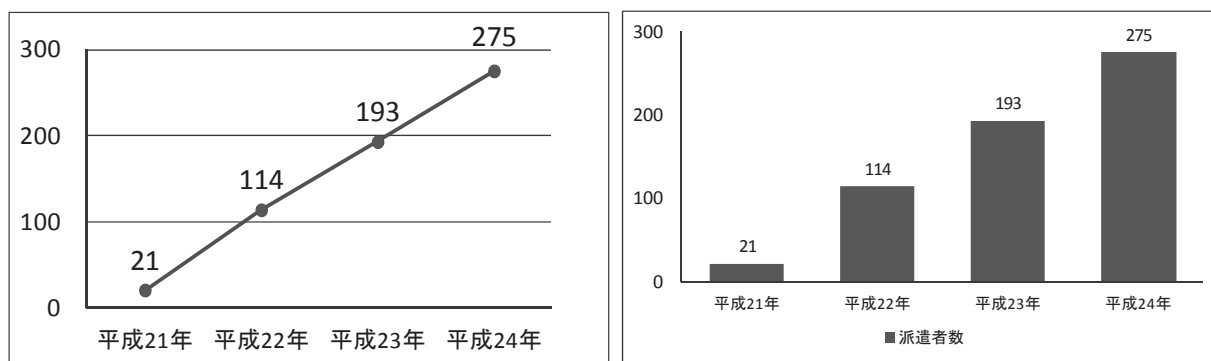
注）派遣枠数は 1 年間の留学、1 名で換算している。留学期間が 1 学期の場合は 1 年に 2 名の派遣が可能な協定が多くある。派遣率は実数になっているため、派遣率が 100%を超えるケースが出ている。

・中国の二大学とは、交換留学生枠を利用した学費免除型短期派遣留学プログラムが実施されているが、その派遣数は中国への派遣実数には含まれていない。

## 2. 京都大学からの交換留学派遣の今後

全体として交換留学の現状は、受入れに対して、京大からの派遣人数が少なく、本学学生の留学や国際交流に対する関心、意欲の活性化の必要性が感じられる。また、前述の通り、特に 2009（平成 21）年度まではアジア圏の大学、特に中国、韓国への派遣学生が少ないことが目立っていた。そこで 2009（平成 21）年度より、東アジアの協定校数校に対し交換留学生枠を利用した学費免除型超短期派遣留学プログラムの提供を依頼した。これらのプログラムへの応募者数は募集人数を大きく上回っており、アジア圏への学生派遣を促進する重要な取組となっている。これ以外にも海外留学促進の一環として多様なニーズに合わせた、3 ヶ月未満の各種短期留学プログラムを企画、実施した結果、これらのプログラムに参加することで、学生の意識を喚起し、また交換留学に必要な英語運用能力を培うことに貢献した。短期留学の経験を経て、通常の派遣留学に応募する学生もあり、効果が出始めている。

図表 5 3 カ月未満の超短期派遣プログラム参加者数推移（平成 21 年度～ 24 年度）  
（国際交流推進機構・国際交流センターが主催しているプログラムの参加者数）



### 3. 新しい取り組み

2013 年 4 月に京都大学では新たに学部の全学共通科目を統括し実施する組織として「国際高等教育院」を設置した。国際高等教育院は学部教育について専任の教員からなる「企画評価専門委員会」を設置している。国際高等教育院では国際標準モデルに基づく学部教育の全面的な改善と合わせて、全学共通科目の授業の半数を英語で提供することとしており、全学で今後 5 年間に 100 名の外国人教員を新たに雇用することになっている。

国際高等教育院では学部生の海外派遣もその重要な役割と捉えており、国際交流推進機構は国際高等教育院と協力して「留学支援検討委員会」を設置し、学部生の交換留学の促進に向けて検討を行っている。

この委員会では従来にも増して、教育部門と国際部門の対話が行われることとなり、今後の学生の国際教育に大きな貢献ができるものと考えられる。

#### (1) 国際高等教育院の設置による交換留学へのインパクト

国際高等教育院の設置は京都大学の交換留学にとって極めてポジティブなインパクトを与えるものとなる。これには 2 つの側面が考えられる。ひとつは、多くの全学共通科目が英語で提供されることにより、海外提携大学からの派遣学生の科目選択の可能性が大幅に増えることである。2013 年には英語で提供される科目が KUINEP の 26 科目に限定されていたが、2014 年には全学共通科目として 100 科目以上が英語で提供される。これらの科目を本学受入の交換留学生在が選択できることになる。これは本学が提携先大学から見て派遣先としての魅力を高めることにつながる。

#### (2) 学部生の交換留学促進の進展

現在、国際高等教育院と国際交流推進機構が参加する留学生支援委員会（ワーキンググループ）では、以下の作業が始まっている。

##### ① 動機づけのための初年次教育・授業の実施

##### ② 1・2 回生の夏休み・春休みでの短期海外派遣による交換留学への動機づけ

### ③外国語運用能力の養成

- ー 交換留学に必要な英語力をつけるには十分な準備期間が必要
- ー 全学共通科目初修外国語と短期留学プログラムとの連携による第二外国語運用能力の強化、交換留学前に単位取得の見通しがつく制度の確立

### ④多様な交換留学先の確保のための外国人交換留学生のための英語講義の充実

- ー トップ大学への派遣にはトップ大学からの受入れが必要
- ー 日本文化や歴史講義の用意（国際戦略、系統講義「京都で学ぶアジアと日本」の推進
- ー KUINEP（京都大学国際教育プログラム）の科目擦り合わせ
- ー 留学生との協働教育の確保、ディスカッション形式の講義の増設

### ⑤留学前・中・後の危機管理のシステム化

### ⑥留学しやすい、また受入れしやすい学期制度の検討

## (3) 国際交流推進機構の取り組み

国際交流推進機構は国際高等教育院と協力して上記の検討事項について検討を行っている。さらに以下の様な取り組みを実施していく予定である。

### ①海外派遣先の開拓

2008 年より学生の留学ニーズに基づく海外派遣先の開拓、学生交流協定の締結を進めているが、今後一層の加速化が求められている。2x by 2020 では大学レベルの学生交流協定締結数を現在の倍の 150 件とする予定である。新たな派遣先としては以下の様な点を検討している。米国や英国など、派遣先数が限定された地域の派遣先の増加、学生のニーズがあるにもかかわらず派遣先がない地域についての重点的な拡大、たとえばスペイン、イタリア、アラブ圏、南米などでの提携大学の増加である。

### ②短期交流プログラムの充実

交換留学に先立ち、1 回生の短期海外派遣がかれらの留学意欲を高めるために有効であることが分かってきた。このため国際交流科目や海外提携大学での語学異文化研修などを実施していく。

### ③ダブルディグリープログラムなどの支援

交換留学の一つの形態として、修士課程や博士課程学生が交換留学を行い、提携先大学と親元大学の学位を取得するダブルディグリープログラムなどが増えている。国際的な研究者を養成する上でこのようなプログラムは有効であり、国際交流推進機構はこれらのプログラムを開発する部局を支援していく。

京都大学の国際戦略に書かれたように今やグローバルな人材の養成が求められている。このためには学生の海外経験が極めて重要であり、京都大学は今後もこの目的のために様々な努力を行っていく。ぜひ多くの方々の支援をお願いしたい。

## 第2章

### 平成 24 年度 派遣学生の感想

---







経済学部 経済経営学科 4回生 高橋 佑吉

留学先大学 香港大学 (The University of Hong Kong) 【中華人民共和国】

学部・学科 Faculty of Business and Economics

留学期間 平成 25 年 1 月 14 日～平成 25 年 6 月 25 日 (5 か月)

## 研究・学習成果の概要

香港大学では Faculty of Business and Economics に所属し、日本と同様に経済、ビジネスの勉強をしました。授業は英語で、日本と異なりグループワークが大変多かったです。そのためメンバーとの共同作業が多く、学期末はミーティングのラッシュでスケジュール的にかなりきついものとなりましたが、最終的に課題を全員でやり遂げた時の達成感は大きいものでした。内容は、日本の授業よりも深く突っ込んでおり、私としては、とてもやりがいのあるもので今後の学習に大きな影響を与えてくれるものと思います。ビジネス以外には広東語で行われるため、香港の人とコミュニケーションを現地の言葉でとってみたいという思いで受講しました。半年間であったため、そこまで上達しませんでした。少しでも話せるとうれしいものです。現地の言葉を学ぶ重要性を感じることできたのも大きな収穫であったと思います。

## 出発前の各種手続き、準備

留学するにあたって一番苦労したことは、やはり TOEFL の点数を取ることでした。基準の点数を満たすために、5 か月ほどは本当に死ぬ気で勉強しました。大学入学以降は英語をそれほど使っていなかったもので、英語の勘を取り戻すことから始まりましたが、地道に継続した努力の結果、目標の点数をクリアすることができました。犠牲にすることも多々ありましたが、その分、英語に対してのかなりの自信をつけることができ、また、同じく留学を目指し、勉強を頑張っている学生とも仲良くなれたことは今でも大きな財産となっています。ここまで、英語の勉強を継続することができたのは、「留学してみたい」という強い思いが自分の中にあっただからだと思います。大変で、もう諦めようかなと思ったことは何度もありましたが、ここで辞めたら今までの努力が水の泡になると思い、気を引き締め頑張り抜きました。留学を目指すにあたって大事なものは、どれだけ留学に行きたいという熱い思いを持てるかだと思います。なぜ留学したいのか、留学をして何をしたいのか、ということを自分なりに考えておくと、しんどくなった時の心の支えになるかと思います。

各種手続きですが、香港は書類（多少面倒ですが）を記入して留学生課に提出すれば、あとは香港からビザが発行されるのを待てばよいだけであり、大使館に行くなどの必要性はありませんでした。これは非常に助かり、手続に関してはどこよりも簡便であったと思います。その他の手続きも特に大変なものはなく、期限通りにきっちりやっていけば、特に問題もないかと思います。当たり前のことですが、万が一ミスがあった場合にも対処ができるように早目早目の提出を心がけてください。



## 寮生活、その他生活

香港大学はイギリスの影響を強く受けているためか、寮の文化がとても特徴的でした。現在は13の寮があり(今後増える予定)、学期ごとにスポーツの寮対抗の試合があって、寮ごとに特徴も違い新鮮で面白かったです。(※学生全員が寮に所属しているわけではありません。)ちなみに、私が所属したのは、男子寮で、スポーツがとても盛んでした。せっかくなので、何かやってみようと思い、陸上部とラクロス部に参加して試合に出場したりなどして寮生活を大いに満喫しました。

また、香港は想像以上に自然が多く、週末には、友達とハイキングや近くの離島に行くなどして、他にも、日本人の社会人の集まりに参加したりなどして精力的に動いていきました。留学では、友達を作るにしろ、遊びに行くにしろ、まずは自分からどんどんアプローチしていかないと何も始まりません。逆にそこで動くと、どんどん面白いことが起こってくると思うので、この点は常に意識しておいてほしいです。

## 留学中の問題点・困難な点

留学中に困難であった点として、学業と部活の2点があります。

まずは、学業について、授業は英語で行われ、教授の話していることは概ね理解でき、ついていきましたが、ディスカッションやグループミーティングとなると、話の速さや自己主張の強さなど圧倒され、当初はただ座ってただけの時もあり、悔しい、情けない思いをしたことが多くありました。しかし、このままではいけないと思い、事前に予習に力を入れ、発言をすることを意識することで、少しずつですが、慣れるようになっていきました。こうした小さなことを積み重ねることで、自分に自信がつき、また頑張ろうという気持ちが起こってきます。最終的には、しっかりと発言し、またグループの活動にも貢献できるようになっていきました。次に部活ですが、陸上部では寮内の練習で好タイムを出して、いきなり寮対抗の試合に出させてもらいましたが、ラクロス部では周りのレベルが高かったため、実践練習や試合には全く出場することができず、最初はボール拾いなどもしていました。しかし、チームで誰よりも声を出し、またボール拾いでも一生懸命するなど、自分にできることを最大限にすることで、まずは、チームの一員として認めてもらうようになり、自主練習を繰り返すことで技術をあげ、最終的にはレギュラーの地位を獲得できました。

このように、留学中に幾多の困難に直面し、逃げたくなることは何度もありましたが、決してあきらめず、そしてその時の自分の力を素直に受け止め、何ができるかを冷静に考え、実行に移していきました。状況というのは一気に変わるものではなく、小さなことの積み重ねで少しずつ変化していくものであるということを実感することのできた体験でした。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

私は留学するにあたって、「多様性の中でのリーダーシップを高める」という目標を掲げていました。これからの時代を考えたときに、「グローバル」と「リーダーシップ」というワードは不可欠だと思ったからです。この思いを胸に、留学に飛び込んでみたわけですが、待っていたのは、理想と異なり、発言できない、チームの中で存在感を発揮できない情けない自分でした。しかし、先ほども述べたように、ここでくじけるのではなく、その場で自分ができる最大限の努力を心がけてください。そうすれば、きっと何か見えてくるものはあると思いますし、道も開けてきます。私もそうした努力を繰り返すことで、自分の毎日の生活を創っていきました。最終的には、リーダーシップが発揮できるとまではいきませんでしたので、目標達成度からいうと低いと思います。しかし、それ以外で得ることは本当にたくさんあり、非常に充実した留学生活を送ることができたと思います。みなさんも、行く前に目標を立てること、留学中に困難にぶつかっても決してあきらめないことは、必ずしてほしいと思います。自分の力で道を切り開いて、ワクワクした毎日を送ってってください！





経済学部 経済学科 4回生 酒井 航二郎

留学先大学 香港大学 (The University of Hong Kong) 【中華人民共和国】

学部・学科 Social Science

留学期間 平成 25 年 9 月～平成 25 年 12 月 (4 か月)

## 研究・学習成果の概要

私は Social Science という学部を選びましたが、その理由として、ディスカッション主体の講義を経験すること、その中で自分の発信力を高めるという目標を持っていたことがありました。受講した講義の中に、ディスカッションやディベートを毎週取り入れて展開するものが幸い三つ以上あり、その意味では理想的なクラスを選ぶことができたと思っています。

その中で自分が発信しなければならない状況は二通りありました。一つは自分から発信する場合、そして二つ目は、特にトピックが日本やアジアの情勢に関連する時などに、発言を求められる時です。回数としては二つ目のパターンの方が多く、特に 10 人以下のグループに分かれてのディスカッションにおいては日本代表、アジア代表として周りの学生から独自の考えを期待される立場になります。個人としてあまり精通していない、例えば政治分野に話がいった時などは自分でも満足のいく発信は全くできませんでした。正直、留学全体を通じてもまだまだアカデミックな分野での発信力という点では、特に欧米の学生とは大きな距離を感じます。

しかし学びも大きいと感じています。一つ目の学びとしては、相手や周辺が自分に何を期待してその場に臨んでいるか、又はどんなことを期待され得るかを予測してその場に臨むことの重要性です。そして二つ目としては、そのための予備知識であったり、専門用語をできるだけ事前に目を通しておくことがどれだけ自分を助けてくれるかということです。そのことは日々の生活で多くのことに興味を持ち、見聞・教養を深めることが重要であることも意味すると私は考えています。準備が重要であるとは言ったものの、的確かつ十分な準備を毎回徹底することはかなりの時間的困難を伴うことを経験しました。普段から、自分の好きな分野でよいので教養を深めておくのが一番であると感じました。

その意味において、個人的に特に海外に出る際に重要だと思う分野は、歴史（特に日本を取り巻く明治以降のもの）と政治です。

## 出発前の各種手続き、準備

2012 年 9 月からの派遣留学でしたが、願書を提出したのはおよそ一年前の 2011 年 10 月頃でした。その段階までに必要な語学の能力、推薦状の準備などを完了させておく必要があるので 1 年以上前から意識しておくことが必要だと思います。それと並行して応募可能な奨学金があるかどうか調べる必要があります。私の場合は JASSO の短期派遣留学を受け取ることができましたが、これは留学生課の方にお世話になったものなので、



自分でも探す努力が必要だったと感じます。

基本的に派遣先の大学とは留学生課を通じてコンタクトを取りましたが、渡航日が近づいてくるにつれて派遣先の窓口と直接連絡を取るようになりました。派遣留学に関しては寮や住まいの手配や手続きの案内も非常に丁寧だったと記憶しています。

## 寮生活、その他生活

今年度から香港大学の学生数が大きく増えたため、希望していたように寮には割り振ってもらえず、大学付近のアパートを大学が提供してくれました。一緒に住んでいたのは他の交換留学生で、私を含めて4人1部屋で生活していました。メリットとしては同じ境遇（交換留学生）と共に生活したこと、寮よりも生活の拘束がなかったこと、人数が少なく深い関係を築けたことが挙げられます。毎日遅くまで揃って勉強し、それぞれの国のことを話し、外に遊びにも出掛けました。

デメリットとしては自分で動かなければ現地の学生との交流の機会がなかなか得られないことです。ただし、これは自分の行動次第と少しの運で乗り越えられるものなので自分自身はあまり苦労しませんでした。

日々の生活としては学業以外では、サッカー、ドラム、水泳と自分の趣味を使って交友関係を大きく広げられたのが良い経験になったと感じています。また日本にいる時と比べ圧倒的に学習時間が増すので、意識的にその様子リフレッシュの時間を大切にするようにしました。

## 留学中の問題点・困難な点

交換留学生のルームメイトがいたこと、派遣先大学の制度で現地の学生が頻繁にコンタクトを取ってくれたことで手続き上の大きな問題はありませんでした。学業においては困難な点がありました。特にディスカッション形式の授業では自分の発信のスピードが周りの議論に中々追いつかず、苦労しました。対策としては予習して、議題になりそうなトピックに必要な専門用語を予め理解しておくことが重要なのですが、それだけで解決する問題でもありませんでした。これからもコツコツ継続的に英語の勉強をしていくしかないと思います。

もう一点日常生活で苦労した点は、現地の方の多くが英語を理解しないため、街で小さなことでも理解してくれる方を探して聞かなければなりませんでした。しかしそれが広東語、中国語を勉強するモチベーションになったので、長い目で見ればプラスな経験となりそうです。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

人から聞いた言葉ですが【留学を満喫するための条件として「英語力（語学力）、積極性、一芸」を兼ね備えることが必要】ということでした。一芸と言うのは、もっと崩して言ってしまうと趣味です。自分で経験して見て、これが真実であると感じます。留学先でも変に自分を変えずに好きなこと、興味があることに素直に生活することが重要なのだと思います。もちろん出発前の準備や勉強は大変なことが多いですが、日本を外から見ることで自分と日本のことを深く考えさせられることは本当に有意義な経験になると思います。



教育学部 教育科学科 3回生 **中村 優士**

留学先大学 香港中文大学 (The Chinese University of Hong Kong) 【中華人民共和国】

学部・学科 IASP プログラム (International Asian Study Program)

留学期間 平成 25 年 1 月 8 日～平成 25 年 5 月 23 日 (5 か月)

## 研究・学習成果の概要

この留学における学習成果として、言語面の学習と、専門科目の学習の二点を挙げたいと思います。まず言語面に関して、私は英語と中国語の習得という欲張りな目標を持っていました。普段大学の中では主に英語を用いて生活し、英語の講義を受けます。しかし香港中文大学は中国語教育で有名な学校ですので、中国語を学ぶ環境がたいへん整っております。そのため理論的には二つの言語を効率よく学ぶことが出来ます。もちろん二兎追うものは一兎をも得ずという諺があるように、すこし手を伸ばしすぎだと批判されるかもしれませんが、実際、私の英語、中国語能力ともに一定の目に見える成長を遂げることが出来ました。また専門科目の学習ですが、普段日本語で学んでいることを英語の教科書を使い、英語を学ぶことは非常に刺激的でした。違う視点から自分がある程度精通している学問分野を見てみると、新しい発見がたくさんあるからです。そしてチュートリアルの授業の際に、同じ専門を持つ世界の学生と議論したり、意見を交わしたりすることは非常に新鮮で刺激的な体験でした。

## 出発前の各種手続き、準備

出発前の準備は、Bank Statement などややこしい手続きもたくさんあったので、もう少し早くしたらよかったなと後悔しました。また寮や授業の手続きの際、先輩の話をもっと聞けばよかったなと思います。というのも寮選びは、留学生活において非常に重要ですが、どの寮がいいかといった情報は実際留学をしていた方が一番知っているからです。私は面倒くさかったので、事前に寮を選ぶ際 No Preference としたら、一番遠い寮に入れられました。

## 寮生活、その他生活

寮は 3 人部屋でした。欧米人 2 人とシェアルームをしていて、生活リズムの違いなど少し苦労する面もありましたが、よい経験になったと思います。また寮費が一学期間 5 万円ほどで、非常に安かったです。食生活に関して、普段の食事は主にキャンパス内の食堂でとっていました。200 ～ 300 円でお腹一杯になる手軽な値段です。週末には香港の美食を求め街にくだしたり、みんなで各国の料理を作ったりしていました。

また、留学中周辺の国々を旅行することがあると思いますが、香港はアジアの中心地。本当にどこへでも気軽な値段で旅に出かけることが出来ます。普段一緒にいる友達と、よりお互いを知り仲良くなるチャンスです。私

は一学期間で、中国、インドネシア、タイ、台湾へ旅行に行きました。

## 留学中の問題点・困難な点

留学中苦労したことはやはり言語の面でした。香港人の母語は英語ではありませんが、みな流暢な英語を話し、授業のディスカッションやグループワークでは自分の無力さに歯がゆい思いをしていました。またエッセイなどで評価される授業の成績は散々たるものでした。全ての講義に出席し、予習復習を徹底してもAをとることが出来ませんでした。この経験は、自分の甘さと、世界の厳しさを知ることが出来た有意義な経験でした。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

当初の目標は、英語も中国語もペラペラになることや、友達100人作るなど、漠然としたものだったため、それらが達成できたかはよくわかりません。こういった事態に陥らないようこれから留学される方は‘なぜ留学するのか’を言語化できるレベルまで、出発前に自分の中で考えを深めていくことをお勧めします。そうすることで留學生活における目標や、その目標達成のための手段などを具体的に設定することができ、留學生活をより充実したものにする事ができると思います。

僕の場合は、自分の中で大切にしていた、なるべく多くの人に会い、話をするという点については徹底できたと思います。1 day trip や、国際会議のスタッフボランティアなど、参加可能なイベントにはほとんど参加し、出会いの場を大切にしました。また Language Exchange の制度を利用して、見知らぬ人に会う機会も意識的に創出したり、大学のサッカー部に所属して現地学生の生活に近いものを体験する努力もしました。これらを実践していく中で私が感じたのは留学＝語学という考えは間違いではないものの、少し寂しい考えであって、実際には語学以外に得られるものの方が多かったようにも思います。この点で、留学を考えている方は、語学を勉強するために欧米に行こうという考えは少し横において、面白いことを探しに留学に行こうなど、違った角度から留学先を探してみتهいかがでしょうか。極論、語学は本気を出せば日本で限りなく向上させることができるのだと思います。選択肢を絞ることなく、様々な国へ留学に行った先輩の方に話を聞いてみることをお勧めします。そうすることで、より自分の成長へと繋がる決断ができると思います。





## 法学部4年生（5回生） 松永 万実

留学先大学 香港中文大学 (The Chinese University of Hong Kong) 【中華人民共和国】

学部・学科 IASP プログラム (International Asian Study Program)

留学期間 平成 24 年9月 1 日～平成 25 年5月 20 日（9か月）

### 研究・学習成果の概要

交換留学を決意したきっかけは 2010 年秋の経団連か大学生の内向きに懸念という新聞記事です。自分は企業の国際的な事業活動でグローバルに活躍する意思を持てるかを自問し留学を具体化しました。折しも専門である独占禁止法が施行され、また周辺国のハブとも言える香港を留学先を選び、文献や駐在の方からのお話を通して香港の競争法の現状を知るとともに、できる限り多くの国籍の違う学生との交流を通じて様々な文化や価値観に触れ、物事を柔軟に捉える視点を持つことを目標としました。

注力した東アジア国際関係や外国法の授業では、自身の意見を持ち主張すること、相手の意見への論理的批判が求められましたが、激しい議論の場への経験不足から思うように自分の考えをアピールできず大変苦い思いをしました。他の学生が確固とした意見をもって発言する一方、私は主張したい考えがまず曖昧なままで押し切られることが何度もありました。しかし当初の決意を忘れず、何事にも目的を達成することに努めようと、知識を確実にし、多くの国の学生に意見を求め、徹底的に考え抜き論理的な説明に努めた結果、議論の場も満足のいく成績を修めることができました。東アジア国際関係や互いの国について友人と率直に意見を交換できた経験は、私にとり国家間の問題を克服し、真の友好を築く可能性を感じる重要な一歩でした。世界における日本の立場、発信すべき意見、改善すべき課題、いかに日本が世界でプレゼンスを示せるか、何より色々な国の色々な人の意見を踏まえた上で、論理的に説明できる自分自身の考えを持つことに重心を置き、実社会に活かしたい思います。

### 出発前の各種手続き、準備

ビザの申請…必要書類を送ると派遣先大学側が全て手続きしてくれました。

住居…学生寮が用意されており、こちらも大学側が手続きしてくれました。

### 寮生活、その他生活

とても快適に、楽しく寮生活を過ごせました。香港中文大学には学生寮が現在6つあり、学生は所属寮を基盤として学生生活を送ります。私が所属した Morningside College は比較的新しく、アクセスも便利なので特に良かったと思います。心配していたルームシェアですが、大学側が事前にとった質問票をもとに、趣味などが似通った学生をルームメイトに選んでくれることもあり、ルームメイトは気の合う大変良い友人となりました。



## 留学中の問題点・困難な点

問題点は思い当たりません。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

上記の通り、競争法の知識を深めること、東アジア国際関係などについて各国の学生と意見交換し物事を柔軟に捉える視点を持つこと、この2つの目的が十分に達成されたと自負しています。特に昨今混迷を増す東アジア国際関係は、今こそ学ぶ、深く考える価値があります。このテーマを学ぶ上で香港は、安全、生活環境、学習環境面全てにおいて最適ではないかと考えます。

私は4回生夏からの交換留学だったので、就職活動を考えると不安で迷いがかなりあったのですが、結果的には留学を有意義に過ごし、帰国後の就職活動も満足に終わることが出来ました。留学前に準備をしっかりしていれば4回生から留学してもなんとかなります。時期が遅いという理由で留学を諦めてしまうのは勿体無いので、後悔しないように学生時代やりたいことをやってから社会に出られることを強くお勧めします。







経済学部 経営学科 4回生 **宮本 知佳**

留学先大学 高麗大学校 (Korea University) 【大韓民国】

学部・学科 経済

留学期間 平成 24 年 8 月 29 日～平成 25 年 1 月 31 日（5 か月）

## 研究・学習成果の概要

正規学生や先学期からの留学生達が履修登録を終えた後に、新しく交換留学生が履修登録できるシステムになっており、人気が高いビジネスのクラスや私が受講したかったクラスは満員で、思うようなクラスを受講することができませんでした。しかし、Business English のクラスでは少人数でクラス内での発言も毎回求められるクラスであったので、ビジネス英語を学ぶと同時に、社交性や異文化コミュニケーションも学ぶことができました。今後、社会に出て働くにあたって、とても有意義なクラスであったと感じています。

また、1 月末まで受講した韓国語の授業では、アメリカ、ドイツ、中国など様々な国から留学生達とともに、文法から会話まで韓国語の能力を上達させることができたと感じています。また、日本で日本語で韓国語を学ぶのと違って、英語で韓国語を学ぶことは興味深かったです。1 月末に、授業内で韓国語能力試験の問題を解く機会があったのですが、韓国語能力の伸びを実感することができました。

さらに、韓国語の会話のみに特化した授業では、日常のシーンで実際にすぐに役立つフレーズや会話を学ぶことができ、現地での生活に役立ったと感じています。普通の韓国語の授業と授業内容が重複することも、多々あったのですが、良い復習の機会となり、より、知識を定着させることができたと考えています。



経済学部 経済経営学科 3回生 **若松 美歩**

留学先大学 延世大学校 (Yonsei University) 【大韓民国】

学部・学科 経済学部

留学期間 平成 25 年 2 月 21 日～平成 25 年 12 月 21 日 (10 か月)

## 研究・学習成果の概要

2013 年 2 月末より 2013 年 12 月末まで韓国の延世大学校経済学部で派遣留学生として約 1 年間勉強してきました。派遣留学をするにあたって、出発前に目的を大きく二つ設定していました。一つは東アジアにおける経済学の研究、もう一つはアジアを正しく理解し、客観的に見る目を養うことでした。まず一つ目についてですが、基本的に留学先では現地大学生の受講する授業と一緒に受け、韓国における経済学部生に期待される役割というもの肌で実感しました。大部分の経済学部生が金融関係の機関への就職または研究・進学を希望しており、授業一つをとってみても常に情熱的で積極的に質問の飛び交う活発な授業を展開していました。いまや成長後の段階にさしかかりつつある韓国において、経済学というものの重要性が高まっていることがひしひしと感じられました。二つ目の目的は「アジアを正しく理解し客観的に見る目を養うこと」ですが、授業で会う現地大学生だけでなく、部活動でできた現地の友人、ボランティア活動の際出会った社会人、他国からの友人と触れ合うことによって、ある程度達成されたのではないかと思います。当然これは一朝一夕にはなしえないことであり、今回の留学でアジアを正しく客観的に完全に理解したとは到底言えませんが、少なくとも様々な立場の人間と意見を交換することによって、多様な価値観があることを学び、日本にいただけでは見えてこなかったことがたくさん見えました。

## 出発前の各種手続き、準備

出発前はちょうど日本で春休みだったので事務的な手続きは学期中に済ませる必要がありましたが、その他の手続きについては比較的余裕をもって済ませることができました。

## 寮生活、その他生活

次に生活についてです。前半 4 か月間は寮 (2 人部屋) に住み、後半 6 か月は下宿 (洗面所、風呂場、洗濯機等共有の食事を提供してくれるタイプ、部屋は 1 人部屋) に引っ越しました。前半は住んでいた寮は校内に設置された留学生専用の寮で、寮内の公用語は英語、ジムやコンビニなど施設も充実していました。ルームメイトがアメリカ人の留学生で休みの日に遊びに行ったり、週末には町のクラブに繰り出す留学生たちでロビーがごったがえしたりと、外国人留学生が 500 人以上住むこの寮での生活はまるで韓国ではないようでした。英語力を伸ばすための留学もこの学校なら大いに意味があると思います。(実際一昨年夏、英語短期研修をしに東南アジア

の国で過ごした1か月より、この寮で過ごす5日の方が英語力が圧倒的に伸びたと感じました。) 下宿での生活は完全に韓国らしい生活で、下宿のおばさんが毎日朝食・夕食を作ってくれ、夏至や盆など暦上重要な意味を持つ日には日に合った伝統的な料理を作ってくれ、韓国の伝統文化を身近に感じることができました。

## 留学中の問題点・困難な点

留学中に困った点は、水回り環境がよくなかった点です。最近増えてきてはいますが洗面所で紙を流せるところが少なかったり、水が逆流して来たりということとはしばしばありました。これに関しては一留学生として対策のしようがありませんので、覚悟を決めるしかありませんでした。食べ物についてですが、やはり辛い食べ物、脂っこい食べ物が多いので、健康面に気を付けて食べ過ぎないようにしていました。個人的には淡泊であっさりした食べ物が好きなので、友人が来るたびにフリーズドライのもずくスープを持ってきてもらっていました。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

全体を通して、当初の目標は達成され、それ以上の成果が得られたと思います。具体的には、当初想定していた勉強面での成果に加え、外国で暮らすということを通じて慣れない環境への適応力、精神的な強靭さを得、また本当に多様な人々との関わりを通じて世界に通用するコミュニケーション能力が身に付きました。私はもともと外交的な性格ではないのですが、「この1年ばかりは」と覚悟して意識的にいろいろな人と話すようにしました。これから留学される方へのアドバイスとして、最大限積極的になることをお勧めします。留学先では自分のことを知っている人など一人もおらず、京都大学という名前も知らない人がほとんどです。自分から動かなければいつまでたっても友人はできません。私の場合、学期初めに、当時外国人のいなかった農楽と呼ばれる伝統芸能サークルの部室に一人飛び込み、入部許可をもらい、毎日放課後一緒に練習をしてかけがえのない友人をたくさん作りました。この時出会った友人は国籍の壁を越え、一人の人間として尊敬できる人たちばかりです。留学をすれば偏見・差別等困難なこともたくさんありますが、一生忘れられない、お金には代えがたい経験を得ることができます。これから留学される方には、自分が留学先で京都大学を代表する「顔」、日本を代表する「顔」となっているという事実を忘れず、積極的に行動して実りある留学生活を送れることを祈ります。



農楽部の創作公演後の集合写真（上段左から4人目が若松）



延世大学校（青）と高麗大学校（赤）とのサッカー試合での応援風景（1年で一番大きな学校行事）



経済学部 経済経営学科 4回生 久保田 聖良

留学先大学 チュラーロンコン大学 (Chulalongkorn University) 【タイ】

学部・学科 経済学部 (EB)

留学期間 平成 25 年 8 月 10 日～平成 25 年 12 月 30 日 (5 か月)

## 研究・学習成果の概要

チュラロンコン大学に留学した成果としては大きく分けて 2 つ挙げられます。ひとつは経済学部で留学して履修した科目 'Economic Diplomacy' の授業で感じたこと、そしてもうひとつは課外活動として参加したタイの民族舞踊のクラブから感じたことの 2 つです。

Economic Diplomacy は京都大学経済学部では開講されていない、まさに経済の観点から見た世界の政治・外交に関するコースで、その内容の面白さもさることながら、わたしはこの授業を通していかに自分の 2 年半の学習が適当なものであったか、そして国際舞台において日本人がいかに自分の主張を言えないのかを痛感しました。授業は毎週ディスカッションベースで行われたのですが、外交学という内容も相まって留学生はそれぞれ各国からの代表のような形で意見を言っていました。その発言内容はきちんとした事実・史実に基づいており説得力があるとともに、発言自体が大変自信にあふれているように思えました。一方クラスにいた日本人はみな、授業中にずっと下を向いていました。この理由としてはまず、日本人の（特に京大の）学生は海外の学生に比べて圧倒的に学習時間が足りていないゆえに高度な経済外交の話題についていけなかったこと、そして第二に英語力不足で速度の早い議論についていけないこと、そして第 3 に日本人は他の留学生に遠慮してしまうことが挙げられると思いました。わたしは留学中ずっとこのことを悔しいと思い続けていました。「学習成果」といえるかどうかはわかりませんが、この留学を通じて、“大学での学び” というものに対する意識・モチベーションが大きく向上したこと、そしてコミュニケーションツールとしての「英語」に対する意識が変わったことは確かです。大学生活は残りわずかになってしまいましたが、それはつまり腰を据えて自分の好きなように学べるのもあと少し、ということです。海外の学生に負けぬようにきちんと「経済学部生」として恥じぬような学びをしたいと思うようになりました。また英語はノンネイティブにとって意思伝達の「手段」にすぎない、という考えにもなりました。発音、文法が間違っていようと、大切なのは「相手に誤解なく自分の考えを伝えること」です。自分の英語はまだまだこのレベルに至ってすらいませんが、こう考えられるようになったことで公の場でも昔よりは発言できるようになりました。

2 つ目の成果はタイの東北部 (Isan) の民族舞踊クラブに参加したこと。留学を単なる勉強で終わらせたくないという思いから、セメスターが始まって 1 週間経った頃に自力でこのクラブを見つけました。もともと京都大学でよさこいダンスサークルに所属していたこともあり、タイの民族舞踊を教わることができるこのクラブはまさに理想的でした。このクラブを通じてタイの地元の学生の友達をたくさん作ることができたとともに、タイの田園地方の文化・生活・人びとと触れ合うことが出来ました。このクラブの学生たちの、地元の伝統音楽



と舞踊を守り・伝承していこうとする姿はとても感銘深いものでありました。しかし一番印象的であったのはこのクラブの学生たちが自分たちの地元の後進性を危惧し、それに対して行動を起こしている点でした。タイの東北部は首都のバンコクに比べるとかなりの後れを取っており、インフラもさることながら、子どもたちへの教育は正直いってひどいものでした。それに対して、東北部出身のチュラロンコン生はクラブ活動の一環として東北部を周り、子どもたちに音楽や踊り、勉強を教えるとともに、文房具屋やお菓子のメーカーをスポンサーにつけて子どもたちにその商品を配布しているのです。私も短い間ではありましたが、こうした活動に同行させてもらった中でタイの深刻な格差問題、そして本当の意味での発展ということを考えさせられました。また自分が日本人として生まれたことがどれだけありがたいことなのかも痛感させられました。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

留学当初の目標として、わたしは以下の3つを掲げていました。

- ①英語の上達
- ②タイのNO.1大学の学生がいったい何を（とくに自分たちの国“タイ”について）考えているのかを知る
- ③日本人のイメージを少しでも明るいものにする

まず①については多かれ少なかれ上達したと思います。タイに留学する人はみな、「タイ語で留学するの？」と聞いてきましたが、わたしの場合、街で何か買い物する以外はすべて英語漬けの毎日でした。ルームメイトを含め、留学生の大半は欧米からの学生であったために、彼らの英語力は大変高く、そんななかで自分が知らない表現を吸収する毎日でした。また授業で課されるレポートやプレゼンも全て英語だったため、英語に対する抵抗も今ではかなり減ったと思います。

②については正直達成度50%といったところでした。東北部出身の学生が何を考えているのかを知ることが多少出来ましたが、僕としてはもっと多くの学生と意見を交わしたかったなと思います。この原因としてはタイの学生と友だちになれたのがセメスターの終わりであったことが挙げられます。前半から積極的に友達を作ることができていたら、もっといろいろと話しを聞けたのだと思います。

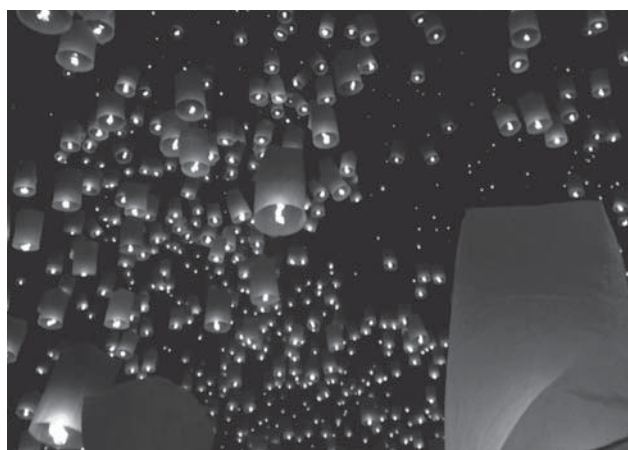
③についても達成度は50%です。日本についての世界のイメージはどちらかと言うと「静か・おとなしい・真面目・面白くない、人生を楽しんでない」というほうに傾いていると思っていた僕は（そして実際そのように思われています）、この留学中、僕と出会った人の日本人のイメージをもっと明るくして、日本の現実に則したものに近づけようと思いました。（世界の人々が思うほど日本人はシャイではないし、面白みもあって、日本人なりに人生を楽しんでいる！と僕は思っています。）しかし実際は思うようにはいきませんでした。やはり自分の乏しい英語力が邪魔をして日本にいたときと同じようには振る舞うことができませんでした。ルームメイトや特別仲良くしていた友達には「日本人のイメージが（ポジティブな意味で）変わった」といってもらえましたが、そのほかの学生には特に影響を与えられなかったように思います。

これから留学に行く人に対してはまず、「とにかく行動する」ということをアドバイスしたいと思います。やっと手にした留学の切符、しかし時の流れは恐ろしいほど速いです。きちんと目的を持つことは大切だと思いますが、それ以上に一日一日を大切に、転がってきたチャンス、誘いを有効活用して飛び込んでみることで、振り返った

ときに「充実」の2文字が勝手についてくると思います。そして、第二のアドバイスとしては「英語（言語）を障壁にするな」ということです。偉そうに言っている私もこれには最後まで苦しめられました。やっぱりコミュニケーションの基本である語学が不安だと思い切った行動もできないと思います。しかし、世界の人々は日本人が思っているほど語学に対して楽観的です。多少間違っても誰も気にしません。僕らにとって英語は母国語ではないのですから、そんなに恥じることではないのです。それよりもとにかく「何を伝えるのか」、こちらのほうがよっぽど大切だし、日常では言語を通り越して感じる意思疎通、フィーリングみたいなものの方がよっぽど大切です。とにかく語学が不安だから目の前のイベント・誘いに飛び込まない、こんなことは起こらないようにしてください。飛び込んでみたら案外大丈夫だった、新しい友だちができた、新しい世界が開けたなんてことはたくさんあります。留学は毎日が新鮮で楽しいことばかりです。語学試験の準備や応募申請にあれだけの長い時間がかかったのに、留学生活自体はほんとうに驚くくらいにあっという間に過ぎ去ってしまいます。しかしその一日一日が自分の人生にとって大きな糧になっていることは間違いありません。今語学試験の勉強をしている人は少しでも納得のいく点数が取れるように、そしてもう留学が決まっている人は留学中に達成する目標などを考えながらいろいろと大学やその国に関して調べてみてください。そして、留学に行ってみたいなと考えながらもまだ何もしていない人は、今日から何か行動に移してみてください。「行ってみたいな」とだけ考えているうちは行けません。本当に行きたいと思っている人は黙って行動し、準備しています。留学は本当に良い経験になります。日本という国に生まれ落ちて、京都大学という最高の環境で学べる今、留学はやる気次第で誰でもできます。頑張ってください。











経済学部 経済経営学科 4回生 **中村 亘**

留学先大学 テルアビブ大学 (Tel Aviv University) 【イスラエル】

学部・学科 The School of Overseas Students

留学期間 平成 24 年 10 月 15 日～平成 25 年 1 月 3 日 (4 か月)

## 研究・学習成果の概要

“Israel Economy” と “Research methods in marketing and in organization” の二科目を受講した。前者は留学生用学部科目であるのに対し、後者は MBA プログラムであったため、留学生課に交渉し受講を許可された。通常の授業に加えて、ヘブライ語講座を自費で受講し、当大学にあるアントレプレナーシップセンターにてインターンシップを行っていた。

## 出発前の各種手続き、準備

### ・事前準備について

SUMMER ULPAN にてヘブライ語の語学研修（参加は任意だが、現地での生活を楽しむために参加した）を 7 月の下旬から予定しており、また交換留学の許可が降りるのが 7 月初旬であったため、7 月は準備や手続きに追われた。交換留学の条件には英語の語学証明を必要としないため、出願すれば許可される可能性が高く、出願後すぐに準備をすることを強く勧める。

### ・保険について

現地の大学で入ることになるので日本で事前に入る必要はないが、有事での損害は多くの場合補償されないことに注意しなければならない。3 カ月で一万二千円前後だった。

### ・寮について

学生寮が必ず用意されるわけではないと言われるが、基本的には空きがあると考えてよい。また大学へのアクセスもよく（徒歩 1 分）他にも留学生が多く住んでいるので寮に住むことを勧める。寮代は \$600/ 月と少し高めだが、設備は充実している。私は寮が確保されない可能性も考慮して、日本にいたときにテルアビブ在住のイスラエル人を友達に紹介してもらい、数件の物件をリストアップしてもらっていた。

### ・現地の留学生課について

すぐに連絡が返信されるわけではなく、なかなか交渉が進まないことが多いのでメールだけでなく国際通話も視野にいれておくべき。



## 寮生活、その他生活

### ・寮の設備について

キッチン・トイレ・シャワーを4人で共有し、2人に一つの部屋が割り当てられる。部屋には Wi-Fi が完備してある。また有料のランドリーもあり、24 時間使用できる。

### ・日常生活について

近くに徒歩圏内にスーパーマーケットやショッピングモールがある。ショッピングモールでは携帯電話を扱う店が入っている。土曜日はシャバット（安息日）にあたるため、これらの店は閉まっているので注意する必要がある。

## 留学中の問題点・困難な点

### ・安全面

建国の歴史から周辺諸国とは対立が続き、また国内にも対立する地区を抱えているため戦争状態になる可能性があることを常に考慮すること。実際に私が留学していたときにはガザ地区からテルアビブ 20 年ぶりにミサイルが着弾し、市内を通るバスが爆破された。私は他の留学生が一時帰国していく中で、決断しなければならなかったが、多くの現地人との交流があり帰国を躊躇してしまった。有事に備えて、在イスラエル領事館では緊急メーリングリストの登録ができるため入国後にはすぐに登録しておくべき。

### ・生活面

他の先進国と同じで基本的にはなんでも手に入るが、日本食を売っていることはあまりなく寿司を出している店があるくらいである。またスーパーマーケットで売っている商品の表示はすべてヘブライ語であり、レストラン等では英語メニューが置いてある。ほとんどの人が英語を話せるが、バスの表示はヘブライ語しかないので毎回聞かなければならない。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

### ・目標と達成度

私は四回生の後期に留学したので、就職活動も終わり卒業単位も四回生の前期でとりきっていたため、単位取得を目標としなかった。目標は専攻分野のより深い理解と異文化の中で自力で生活することであった。

専攻分野に関係する授業は一つしか無かったので、アントレプレナーシップセンター（通称：Star TAU）でのインターンシップに申し込み、リサーチ業務を担当した。またその授業も一般教養の科目であったため経済学の基礎から学ぶことになり、物足りなかったため MBA プログラムの授業を交渉して受講させてもらった。以上のことを考えると理論だけでなく、実践でも自らの専攻分野への理解を深めることができたと感じている。また将来は MBA の取得を視野にいれてるので、学部生時代に海外の MBA がどのような講義を提供しているのかわかったという点でも満足している。

私が留学していた学期は他の日本人や中国人、韓国人の留学生はほとんどおらず、欧米人の中で生活すること

になった。(ルームメイトはアメリカ人、フラットメイトはロシア人とスウェーデン人だった。)そういう中で生活することはストレスを感じる事が最初は多いが、慣れてしまえば自力できるという自信につながった。

### ・アドバイス

多くの人がアメリカやイギリスなどの英語圏や香港等の日本近辺を留学先として選ぶ中で、イスラエルを選ぶことは周囲の人にあまり理解されないかもしれませんが、長期的にみると非常によい選択だと思います。ここでの生活は人生観や死生観を自省するきっかけを与えてくれますし、他の諸外国でも自力で生活をできるという自信がつきます。帰国後に海外に旅行に行くことがあったのですが、日本人でイスラエルに留学していたことがある人はほぼ皆無なので誰もが興味をもってくれました。そこで言われたのは、みんなが行くような国には将来、仕事や旅行で行く機会があるので学生時代にはできるだけ変わった国に行くべきだということでした。

また ULPAN (ヘブライ語の語学研修) の受講をお勧めします。私は SUMMER ULPAN を受講し、その中で多くの友達をつくりました。受講者は世界中からきており、年齢も受講理由も多様です。ユダヤ教の人もそうでない人もいます。この ULPAN と秋学期の間に一ヶ月間の休みがあるのですが、私はここでつくった友達を訪ねる旅をヨーロッパで一ヶ月間していました。

イスラエルは交渉の文化です。従って、自分の意思をはっきりと伝えることが求められ、日本の文化とは異なり最初は少し困惑してしまうかもしれません。しかし、自分の意思を伝えることができればいろいろな道が広がり他ではできない経験をすることができます。ぜひイスラエルへ留学するみなさんには他の留学先や日本ではできないこと、学生ではなかなかできないことなどに挑戦してほしいと思います。その経験が後の人生に大きな影響をもたらすと思います。せっかくあまりみんなが行かない国に留学するのですから、在イスラエルの日本人などを訪ねていろいろ聞いてみるとおもしろいと思います。私は経産省から出向している大学の先生(エジプトに三年間の在駐経験あり)に紹介してもらい、在イスラエルの経産省の人や JETRO ISRAEL の所長に会いにいきました。





農学部 応用生命科学科 4回生 **元根 啓佑**

留学先大学 メルボルン大学 (The University of Melbourne) 【オーストラリア】

学部・学科 Faculty of Commerce

留学期間 平成 25 年 7 月 20 日～平成 25 年 12 月 1 日 (4.5 か月)

## 研究・学習成果の概要

自分の専門とは関係のない経営、マーケティング、アーツ系の授業を取っていました。留学生は最大4つの授業しか取れないのですが、どの授業も課題の量が多く、また語学のハンデがあるため勉強に多くの時間を費やしました。特に「Social Problems in Japan」というセミナー形式の授業では、自分の意見を求められることやプレゼンテーションの機会が多くあり、非常に予習や課題をこなすのが大変でしたが、その分論理的思考力や自分の意見を分かりやすく相手に伝えるという能力が伸びたと感じています。

## 出発前の各種手続き、準備

メルボルン大学への申請自体は特に不明点などなく、簡単に申請を済ませることができたと思います。入学許可が降りてからは、オーストラリアのビザを取得するためにネットで申請を行いました。ビザ取得のためには指定された病院での健康診断の受診が必要で、診断の予約から結果が出るまで約2週間かかったと覚えています。再検査が必要な場合はさらに日数がかかると思われるので、大学から入学許可が降りると速やかにビザ申請を行うことが必要だと思われます。

## 寮生活、その他生活

全国籍の違う留学生4人と大学から徒歩15分くらいのところでフラットシェアをしていました。私の場合はメルボルンに知り合いがいて、その友達に薦められた場所に住むことを決めました。ネットで事前に申請することができ、メルボルン到着当日から住むことができました。幸運にも私はハウスメイトにも恵まれ、住居に関しては特に問題点はありませんでしたが、個人的には現地に着いてから実際に物件を見てから決めた方がその場所の雰囲気等を知ることができてより良いと思います。しかし、その場合は英語での交渉などが必要となるので、不安を覚える場合にはあらかじめ物件を確保しておくことが得策だと思われます。

## 留学中の問題点・困難な点

最初の1ヶ月間は英語が聞き取れず困りました。また、物価が日本の1.5倍～2倍程度なので非常にお金がかかりました。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

留学の目標として「英語力を伸ばす」と「授業に真剣に取り組む」ということを掲げていました。英語力は日常生活をする上で不自由がない程度まで伸びましたが、授業への取り組みに関しては目的意識の甘さから全力で取り組むことができませんでした。＜これから留学する人へのアドバイスとして＞留学は楽しいことばかりでなく辛いこともたくさんあるので、そのときに困難を乗り越えられるかどうかは当初の目的意識がどれだけしっかりしているかに関わってくると思います。



公共政策教育部 公共政策専攻 3回生 中島 聖

留学先大学 オーストラリア国立大学 (The Australian National University) 【オーストラリア】

学部・学科 School of Culture, History & Language (Master of Asia-Pacific Studies)

留学期間 平成 24 年 7 月 16 日～平成 24 年 11 月 24 日 (5 か月)

## 研究・学習成果の概要

京都大学でのドメスティックな研究を、より多角的な視点から考察するために留学をした。実際に留学先大学では、公共政策に関するテーマを扱った 4 つの授業を履修し、アジア・太平洋州の国々の事例を学ぶ中で、日本の事例を客観的に見る力が付いた。

## 出発前の各種手続き、準備

大学での授業開始前に、個人的に語学学校に通う手続きをしなかったため、入学許可を規定より 2 か月前倒しで発行してもらうように要請しました。また、交換留学生在履修できる大学院生用の授業が限られていたため、出発前から教授とメールでやり取りをし、履修可能な授業を確認した。

## 寮生活、その他生活

交換留學生は優先的に寮に入ることが出来るが、寮費が高く、シェアハウスをしている学生も多くいた。寮内ではイベントが定期的に催され、寮生同士の交流を深めることが出来た。ホームステイも経験したが、郊外に住まなければならず、バスの本数が少なく大変不便だった。また、学外での活動として、ボランティア活動に参加したり、言語交換を主催するなどし、自由時間を有効に使うよう努めた。

## 留学中の問題点・困難な点

寮からショッピングセンターがある中心部まで徒歩 20 分以上かかり、バスも時間通りに来ないため、極めて不便だった。また、物価も高く、出費を抑えるため自炊は必須だった。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

多角的な視点を身に着けるという目標は、授業を履修するだけでなく、クラスメートとの授業外での交流や、寮内で友人を作ることを通して達成することが出来た。また、学期終了後に現地でインターンシップをしたため、

日本との商慣習の違いや、労働環境の違いを理解出来たことも大きな収穫だった。ただ大学に行って授業を受けるだけでは留学した意味が無いので、積極的に課外活動に挑戦し、人的ネットワークを広げることを通して、多様な価値観を学んで欲しい。



## 法学部 3回生 シンペン ニティパット

留学先大学 ストラスブール大学 (UNIVERSITE DE STRASBOURG) 【フランス】

学部・学科 法学部 (DROIT, ECONOMIE, GESTION ET SCIENCES POLITIQUES ET SOCIALES)

留学期間 平成 23 年 9 月 1 日～平成 24 年 6 月 30 日 (10 か月)

ストラスブール大学は他のヨーロッパの大学と同様に学期が前期（秋）と後期（春）に分かれ、私が渡航した 9 月は新学期の始まりの頃だった。私は、ストラスブール大学で、前期の間に iIEF (INSTITUTION INTERNATIONALE D'ETUDES FRANCAISES) というストラスブール大学のフランス語学校に通うことにし、後期は法学部 (DROIT, ECONOMIE, GESTION ET SCIENCES POLITIQUES ET SOCIALES) にした。なぜなら、私はよりフランス語を上達させたかったからでもあり、法律以外の分野も勉強したかったからでもある。iIEF では、フランス語以外のフランス社会の基本的な知識や大学の授業を模擬する自由選択科目も設けられており、それに関する見学なども行っている。例えば、私が選択としていたフランス料理という科目は、ワインの種類・各地域の名物、などが紹介され、最後に実際のブドウ園見学が行われた。語学学校での勉強はあまり難しくない上に、課題も日本に比べて非常に料が少なかったのも、かなり暇だった。すると、私はフランス人（主に日本語学科の学生たち）と交流するお茶会のようなイベントによく参加しに行ったり、ジムなどを通ったりしていた。フランス語学校を 3 か月通っていたとはいえ、自分のフランス語が思った通りに上達したかということ、そうでもなかった。

後期になると、私は法学部に移り、フランス人と一緒に授業を受けることになった。こちらの法学部は他の学部と違って、全部が大講義でゼミナールなどの少人数の授業は交換留学生がとれないことになっているので、フランス人の法学部学生たちと接触する機会が少なく、私の友達はほとんど同じ留学生の学生たちに限られていた。履修科目に関しては、私が興味を持っているフランス憲法（統治）、フランス民法（親族部）、フランス刑法（総論）、国際公法、そして、イギリス法の 5 つだった。イギリス法は英語で行われ、それ以外は全部フランス語だったので、私は最初ほとんど聞き取れず、困っていた。おかげさまで、友達がノート貸してくれたり、京都大学法学部自治会のようなこちらの団体が集めたノートをくれたりして、何とか授業についていけた。履修した 5 つの科目の中、残念ながら 1 科目（フランス憲法）単位を取得することができなかった。それ以外の 4 科目は合格点に達し、特に、国際公法と民法親族部は評定の GOOD が得られたので、ある程度、成果が出たとも言えよう。

生活全般に関する話だが、ストラスブールは非常に治安が良く、町全体もとてもきれいで過ごしやすかった。私が交換留学中には、大学が提供してくれた学生寮に住んでいたが、その寮にはジム、宴会室、自習室、などがあり、大学まで徒歩たった 10 分で大変便利なところだった。ストラスブールはドイツまでたった 30 キロで、私は土日によくライン川を渡ってドイツ側に遊びに行っていた。さらに、ストラスブールもまた国際的な町で、欧州人権裁判所、欧州議会、欧州評議会、などの本拠地であり、私がストラスブールに住んでいた間には、何回か欧州人権裁判所へ傍聴や見学に参加していた。



春学期が終わったあとには、帰国する前に約1か月の期間があり、その期間を有意義に活かしたいという理由で、私がパリにあるユネスコのタイ王国政府代表部（PERMANENT DELEGATION OF THE KINGDOM OF THAILAND TO UNESCO）でインターンすることにした。政府代表部でのインターンでは、ユネスコの活動だけではなく、外務省や大使館との仕事も多くて、自分が今まで必死に勉強してきた法律と違う分野の勉強ができ、大変貴重な機会だった。ユネスコのタイ王国政府代表部で1か月働いてから、自分の興味関心は法律から外交や国際系に広がり、今後はより英語やフランス語を鍛え、国際的な仕事がしたいと思うようになった。



経済学部 経済経営学科 4回生 **富澤 由佳**

留学先大学 ストラスブール大学 (The University of Strasbourg) 【フランス】

学部・学科 経済学部・語学学校

留学期間 平成 24 年 9 月 13 日～平成 25 年 6 月 30 日 (9 か月)

10 か月間の留学生活は、本当にあっという間だった。だが、思い返してみれば、本当に毎日が刺激的でキラキラと輝く日々であった。日本に帰った今、改めてこの 10 か月間の夢のような日々を振り返ってみたいと思う。

私の留学の目標は「世界を知り、自分を知る」ことだった。ここで言う「世界」とは必ずしも外国というわけではなく、自分自身にとって未知のもの、あまり知見の無かった歴史や宗教といったことも含んでいる。留学前の自分には趣味も教養も無かったため、もっと世界を知り、視野を広げた上で自分を知りたかったのだ。具体的には、まずは国と国の距離が近いヨーロッパにいてることを活かし、できるだけ多くの国を訪れて自分の知らない世界を自分の目で見て感じる。そして、本などからも知識を取り入れ、視野を広げること。その上で、留学という機会を活かし自分について振り返り、人生についてゆっくりと考える機会にしたかった。留学を終えた今、その目標はしっかりと達成することができたと考えている。ここからは、自分の留学期間に関して、3段階に分けて振り返ってみたいと思う。

初めの3ヶ月は、言語・文化を学ぶ学校に入り、生きることに必死になりながらも、語学力向上を目指した。そのために、現地学生との交流を持つべく、日本食パーティーを開催したり、タンデムという相互学習制度を利用したりして語学の勉強に励んだ。座学とともに私が重要視していたのが、目的の一部でもあった「世界を知る」ということだ。ヨーロッパという地理的優位性を生かし、様々な場所を訪れた。たとえば、スイスのジュネーブ。そこでは国連職員勉強会の開催を知り、参加を交渉。結果、日本では出会うことができない方々とお話しさせていただく機会を得て、自分のキャリアパスを考え直すきっかけとなった。他にも、パリで NPO を立ち上げている日本人女性や JICA の職員の方にお会いし、自分の将来の道を模索した。このようにして、世界について知るとともに、自分についても考え直す機会が増えていった。

次の3ヶ月間は震災関連のイベントを立ち上げ、それに没頭した。「東北地方の雇用創出」「2年経った今でも復興は終わっていない」というコンセプトのもと物品販売、また被災地の現状を示す展示や日本を紹介する展示を行った。展示にあたっては被災時の悲惨な状況だけでなく、被災地の今を伝えることを意識した。授業との兼ね合い、また言語も文化も違う異国の地で会場の確保や様々な調整等、日本では起こり得ない問題も多く発生し苦勞することも多々。けれど同じく留学中の多くの日本人の助けを借り、またストラスブール日本総領事館の協力を得て、結果としてはプロジェクト全体で 450 人以上の集客を得、物品も無事売完という成果を残すことができた。

この活動の原動力となったのは、日本への思いである。奨学生として、日本の代表であるという責任感から、日本代表として日本とフランス両国のために何かしたい、という思いを持っていた。また、初めの3ヶ月間の生活を通して、日本人としてのアイデンティティが強かった。遠く離れたヨーロッパの人たちが、日本で起きた地

震について未だに心配してくれているということも知った。それらの思いを、あとは行動に移すだけだった。

最後の4ヶ月間は自己投資に励んだ。半年間で自分の方向性というのがより一層見えてきて、自分に足りないもの、自分がやりたいことを再発見することができた。それをもとに、経済学・フランス語を中心に学びつつ、帰国直前にはアフリカ・セネガルへ単身渡航。日本からはなかなか行けない場所で、留學生活の中で感じたこと、見えてきたものをさらに深めることができた。

留學を終えて、自分は変わったのだろうか。この問いにはまだ、はっきりと答えることはできない。だが、留學は私に世界を知ろうとするきっかけをくれた。私の留學生活の成果は、これからの自分にかかっていると考えている。奨学生という大変恵まれた立場でこのような経験をさせて頂けたことに本当に感謝している。この10ヶ月間の中で見てきたものをヒントに、今後の日本での生活に役立てていきたい。



法学部 4回生 小島 康平

留学先大学 国立パリ政治学院 (Paris Institute of Political Studies) 【フランス】

学部・学科 学士課程 (学部二年次)

留学期間 平成 24 年 8 月 20 日～平成 25 年 5 月 1 日 (9 か月)

## 研究・学習成果の概要

パリ政治学院、通称シアンスポの政治学を中心とした教育を実地で体験することができた。その体験から私が学んだ成果はフランスの高等教育の方法論という一点に集約される。ここでいう方法論とは、学生が知識や技能を習得する上でなくてはならない、口頭発表や小論文の手法についての規律のことである。そして、一口に方法論を学ぶと言っても、そこには二つの側面がある。方法論「そのもの」の学びと、方法論がフランスの大学で教えられようになった歴史的・社会学的背景の理解、すなわち方法論「について」の学びである。

方法論「そのもの」の学びとは、単にどのように学業をこなすか、改めて手とり足とり教わるということである。口頭発表の構造、——導入部と結論部を含む四部構成で、中間の二部では対立する二つの立場を紹介し、導入部では通常疑問詞疑問文で示される問題系(プロブレマティック)の提示とその疑問文で使われる用語の定義を行い、結論部では対立する二つの見解を「止揚」、ないし「中和」する、すなわち両見解が共通してもっている傾向とそうでない傾向を腑分けして各見解の偏向性を薄めた第三の見解を提示する——は、フランスの中等・高等教育を受けた者は陳腐であるのかもしれないが私には新鮮だった。

留学生も演習に参加しているので、そこには当然うまくいかない発表も存在する。私も失敗したと思った口頭発表をしたことがある。そうした自他の失敗から学ぶことは多々ある。ある先生が留学生中心の演習で、制限時間内に発表を収めようとまくしたてるような聞き取りづらいフランス語を話したモロッコ人の学生に対して「あなたは政治を知らない」とおっしゃったことがある。彼女の言う「政治」とは、皮肉な言い方をすれば教室というコップの中を鎮するローカルルールへの目配せに過ぎないが、「自分の意見について同意あるいは認知を得るには知的な親切心が致命的に重要であり、そうした親切心は実は非常に技術的なもので誰でも意識すれば獲得できる」ということを私はこの指摘から学んだ。

方法論「について」の学びとは、民主主義や啓蒙主義といった理念との関連で、あるいは現代社会に存在する教育について明確な意見をもった諸集団との関連で、自らが置かれたフランスの高等教育の性質を知ることである。秋学期に聴講した「現代民主主義理論」や春学期に聴講した「学校と民主化」という講義は教育社会学理論がご専攻のヴィティエロ先生が担当されていたが、これら二つの講義を通じて私は、フランスの大学で一般的に言って丁寧に教えられる方法論は高等教育の民主化という目的に支えられていることを知り、またそれが一定の成果を収めていることを認識した。

どのように発表するか、レポートを書くか、ということを教える教育は、それがフランスでは「包括的な」知的把握を前提とするため、学生にとっては自らの無関心に対する問い直しにつながる。そうした姿勢を身体化す

るための方法を学べたことが、私の学習成果ではないかと思う。

## 出発前の各種手続き、準備

学生ビザはフランスの場合、所得を証明する書類を特に厳格に審査してくる。そうした書類をそろえるのに手間取ったことが反省点だった。

## 寮生活、その他生活

パリは短期滞在の外国人にとって、価格・発見手段の両面で住居を見つけにくい。在仏日本人向けの新聞を発行している OVNI のインターネットサイト等を参照して7月ではなく5、6月ごろからもっと早めに住居探しをすべきだった。





法学部 3回生 岡田 悠季

留学先大学 国立パリ政治学院 (Paris Institute of Political Studies) 【フランス】

学部・学科 法学

留学期間 平成 24 年 8 月～平成 25 年 5 月 (10 か月)

## 研究・学習成果の概要

私の留学したパリ政治学院は、パリの中心に位置し、歴史・政治学・経済学・法学・社会学の5分野からなる、社会科学系の授業を提供する高等専門教育機関であり、フランスの教育システムの中では一般の「大学」とは一線を画したエリート育成機関として知られてきました。近年、急激な国際化を図っており、学部生のみで1000名を超える留学生を受け入れています。

但し、非常に国際的な環境でありながらも、授業の形式や論述の仕方に対しては決められた方法論(methodology)に従って、フランス式論理的思考を養うことが求められます。イントロダクションからの本論への入り方や、論の展開の仕方、例示の仕方などについて、細かく指導を受けました。ガイダンスを受けた時はきちんと理解したように思えても、実際に自分達でやってみるとなると容易ではないことが分かり、この方法論を完全にマスターすることは留学の1つの大きな目標としていました。

秋学期は政治学、国際関係や開発経済分野における授業を少人数のクラスを中心に幅広く取りました。春学期は、自分の元来の専門科目である法学分野の授業を受講していました。実務家による講義も多く履修した為、新しい知識を得ると共に、講師とも積極的に交流し、将来に向けての示唆を得ることができたと思います。また、少人数のクラスがほとんどであったため、グループワークやプレゼンテーションなどにおいても上述した方法論に従って論理展開をきちんと行えているかが評価され、知識をインプットするだけでなく、どのようにアウトプットするべきかについても多く学べたと考えています。

さらに、今回の留学の最大の目的であるフランス語の習得のため、大学でのフランス語に加え、パリ市が提供する夜間講座に通っていました。語学学校とは比べものにならないほどの低価格で少人数且つ細かくレベル分けされた授業が提供されていたため、学生の私には嬉しい限りでした。英語が支配的な大学での環境ではどうしても不足しがちになってしまうフランス語と付き合う時間をここで補うようにしていました。

## 出発前の各種手続き、準備

出発前の手続きは、色々トラブルが多くありますが、先輩方などにアドバイスをいただきながら乗り越えました。特に、ビザ申請の際には、経済証明以外にも滞在から6ヶ月先までの住居が確保されていることを証明しなければなりませんので、証明を引き受けてくれる知り合いを探さなければならず、非常に苦労しました。

## 寮生活、その他生活

パリ政治学院には寮の提供がないため、初めの一か月は任意であらかじめ提供された国際大学都市（Cité internationale universitaire de Paris）での受入れがありますが、それ以降の滞在先は自分で探さなければなりません。私は不動産の広告やパリの日本人向けのローカルペーパーを頼りに学校からほど近い場所で下宿していました。1つの大学から複数で留学してきている友人は、シェアハウスをしていたり、特にアメリカからの留学生はホームステイしている友人が多くいました。週末などのパーティーの開催は、外食するか、日本の大学生生活と同様で、自動的にスペースの広い友人の家に集まって、行われることが多かったです。

週末は課題に追われていても、できるだけ外出するようにし、多くの美術館に出かけました。パリでは多くの常設展は学生に対しては無料であることが多い（パリ政治学院の学生証があれば、列に並ばなくてよいところもありました。）、多くの芸術作品に触れることができました。

## 留学中の問題点・困難な点

語学の面でも、フランス語がさほどできる段階で渡仏したわけではなかったため、苦労しましたが、時間がある程度解決してくれました。生活面では第一に物価が高いこと、そして、日本ほど便利ではないことが当初苦労する点であると思います。たとえばメトロ（地下鉄）の故障は日常茶飯事ですし、日曜日は、ほとんどのお店が閉まっています。また、スーパーやお店におけるサービスも日本のような献身的なサービスを期待すると落胆することがほとんどです。また、郵便システムに関しても同様のことが言えるため、日本から荷物を送ってもらう際などには注意が必要です。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

私は、①インターナショナル且つアカデミックな環境の中で自身の進路について考えること、②フランス語の向上を当初の留学の大きな二つ目標としていました。①に関しては、留学先であるパリ政治学院での授業は、少人数、且つ、内容も充実したものである上に、留学生や実務家の講師陣も多く、日々、新しい人々に出会い、多様な考えに刺激を受けることができました。自身の進路に関しては、最後にも少し述べますが、専門性の重要性や国際化の波を、英語が公用語でないフランスにおいても強く感じ、世界を舞台に働きたいと考えている私にとって、キャリアについて考える非常に良い機会となったと思います。②フランス語の向上に関しては、留学生が非常に多い大学ならではの問題かもしれませんが、学校では英語が支配的だった為、期待していたほどフランス語を実生活で使う機会に恵まれず、初めは悶々とした日々が続きました。状況打開を試みるべく、上述したように夜間学校に行ったり、ランゲージ・エクスチェンジを活用したりして、フランス語に触れる機会を増やす努力をすることによって、留学前よりは随分上達したとは思いますが。但し、論文をスラスラ書けるレベルには残念ながら達していないため、日本語で考え話す様に、フランス語を使いこなせるように、これからも学習を続けていきたいと思っています。

留学中は、どんな困難が待ち受けていても、あきらめずにタフな精神で、色々なことにチャレンジすることが

重要だと思います。落ち込んでいても、人と交わり、前進を続けることで、予想だにしなかった新しい発見や出会いがあるのが留学の素晴らしい点ではないかと思います。また、できるだけスムーズに留学生活を始められるように、京都大学に留学しに来ている留学先の生徒や以前留学していた先輩方などに事前に色々相談し、情報を集めておくことが重要だと思います。交換留学は他の留学に比べ比較的費用をかけずに、海外で学生生活を送りながら違った世界を知ることのできる非常に貴重なチャンスですので、最大限活用して、実りあるものになることを願います。



法学部 4回生 村井 香菜

留学先大学 ボン大学 (The University of Bonn) 【ドイツ】

学部・学科 法学部

留学期間 平成 24 年 9 月 3 日～平成 25 年 7 月 31 日 (11 か月)

## 研究・学習成果の概要

一年間の留学の中で最初の半期はドイツ語の習得に力を入れた。ボン大学が提供する語学のコースに通うと同時に会話のパートナーを見つけ日本語を教えながらドイツ語を教わった。また英語の授業をいくつか履修するとともに、次の学期に備えて、ドイツ語で行われる歴史学と日本学の授業にも聴講に行った。内容はあまり理解できなかったが、語学の授業ばかりだとモチベーションが下がってしまうのと、授業のドイツ語レベルになれるために有益だったと思う。次の学期はドイツ語の授業を少しと法学及び政治学の授業を履修した。法律の授業をドイツ語でとるのは難しすぎと思ったので、ドイツの近代憲法史の授業と英語で行われた国際法の授業を履修した。政治学部では国際関係の授業を3つ履修した。プレゼンやグループワーク、レポートなどが課された。現地学生と交ざって授業を受けることは容易ではなかったが、興味深い授業内容で先生も友好的で丁寧に指導してくださったために最後までドロップアウトすることがなかった。

## 出発前の各種手続き、準備

奨学金に関して、学内で留学が決まった11月にはほとんどの民間の奨学金が募集を締め切っていたので、DAAD (Der Deutsche Akademische Austauschdienst) (ドイツ学術交流会) しか民間の奨学金は応募できなかった。しかし経団連のグローバルスカラシップという奨学金に京大から推薦していただき (GPA による選抜だったと聞いている)、選考を受け、奨学金をいただいた。

手続きに関して、ボン大学は早い段階で大変丁寧な対応をしてくれたので、スムーズに手続きを行うことができた。

## 寮生活、その他生活

寮生活に関して、ボン大学の寮に住んだ。キッチンとバスが共用の一人部屋か、すべて個室の寮かを選ぶことができたので、他の学生とコミュニケーションをとることができたらと思って前者の寮を選んだ。パーティが開かれてうるさく感じたり、掃除の問題などでストレスがたまることはあったが、一年間という短期間なので海外の学生とそのような生活ができたことから学ぶことは多かったと思う。

その他生活に関して、ドイツでは店が夕方早く閉まり、特に土日は閉まっていることが多いので大変だった。

また気候が大変厳しかったり、食べ物が合わなかったりと辛い思いをした。ヨーロッパに留学していたこともあり各国を友人と旅行できた。

## 留学中の問題点・困難な点

使い慣れていなかったためにクレジットカードが使えなくなり、留学期間中ずっと使えなくなった。またホームシックにかかるなど精神的につらい時期があった。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

当初の目標はドイツ語及び英語力を向上させること、政治学・法学を勉強すること異文化を理解すること、将来について考えることであった。語学力はどちらも上達したとはいえ、まだまだアカデミックなレベルに達していないのでこれからも継続して学習を続ける予定である。ドイツ人学生に交ざって法学、政治学の授業を受け、プレゼンテーション、試験及びレポートをクリアできたことは大変自信になった。授業の履修から問題があったし、授業についていくのも大変だった。ドイツ人学生及び留學生のレベルの高さに驚くこともあったが、追いつこうと努力することで自分の成長や課題を見つけることができた。異文化理解に関しては、相対的に気性が強く、ストレートにものを言うドイツ人に囲まれて暮らすことで傷つくこともあったが、その中で認めてもらうようになるためにはただただ愛想よく振る舞って迎合するのではなく、実力で勝負しなくてはいけないのだと気付けたことは大きな収穫だと思う。ドイツの家庭でお世話になったこと、現地の小学校でボランティアをしたこと、そして留學生と交流する中で、彼らの多様な生き方、考え方に実際触れることができたことも私の将来において大きな意味を持つと思う。さらに、日本や日本の生活から離れて自分と向き合う中で将来についてもゆっくり考えることができた。私は今までずっと日本のために働きたい、と思っていたが、日本を離れて暮らしてみても、客観的に日本を見つめ直すことができた。今まで気づけなかった日本の長所、そして改善していかなければならない多くの課題を批判的にとらえるようになった。同時に世界には解決されるべき課題が多々あることを真剣に考えるようになった。世界の人々と共に世界を少しでも良くしていきたい、という思いが強くなった。留学を通して気づいたことは日本という狭い社会の中でとらわれるのではなく、もっと大きな舞台上で大きな夢を描いていきたいということである。私は日本人として世界に貢献できる人材になるために、専門分野における高度なスキルの獲得、語学力のさらなる向上、そして想像力をもち他人のことを自分のことのように思いやることのできる人間的魅力的ある人を目指すという目標をもつに至った。

アドバイスとしては、リラックスしたり、息を抜いたりする時間を大切にしてほしいということである。留学は特に初めての人にとって、大変なことが多いと思う。挫折もあるだろうし、必ずしも思っていたようにいくとは限らない。私も一年間、決して楽しいことばかりではなかった。学習面ではもちろん、異文化での生活を送る中で大変苦しいと感じることもあった。ドイツ語及び英語での授業、ホームシック、友人関係などリラックスできることが全くと言っていいほどない一年だった。目標を達成することを常に考え、できない自分を責めたり悩んだりすることが多かった。今振り返るとそこまでプレッシャーをかける必要もなかったのではないかなと思う。頑張らない日があってもいいと思うし、家で何もしない日があってもいいと思う。私は少し無理をしすぎたので



はないかと思う。(そのため帰国後は一か月くらいやる気が全く起きなかった。)

留学を通して、多くのことを得ることができた。上記に加えて、ゆっくりと自分と向き合う時間を多く持つことができたおかげで、向上心が強く、負けず嫌いな自分を再発見できたことは大変価値があることであった。大学生活を送る中で埋没していきそうだった個性を再確認できた。また周りの人の優しさに支えられているということもひしひしと感じた。家族や日本の友人に連絡して話を聞いてもらうこともあったし、留学生の友達にも支えてもらったり慰めてもらったりした。



## 法学部 4回生 森岡 みづほ

留学先大学 ライデン大学 (Leiden University) 【オランダ】

学部・学科 法学部

留学期間 平成 25 年 1 月 12 日～平成 25 年 8 月 12 日 (7 か月)

私の留学の目的は3つありました。一つ目は、日本では学びにくい教科を学ぶことでした。そこで私は日本になじみの薄いイスラム圏とアフリカ圏の法体制と政治を学ぶことにしました。二つ目は、英語力を伸ばすことでした。日本にいとライティング、リーディングは伸ばせたとしてもスピーキング、リスニングを伸ばすのは難しいので、この二つのスキルを磨きたいと思っていました。三つめは、オランダという異文化での暮らしを楽しむことでした。ヨーロッパは私にとってあこがれの土地であり、また日本と異なる文化圏だと思ったので、この生活を心行くまで楽しみたいと思っていました。

学習成果は思ったよりも達成できませんでした。自分の英語力が低く、すべて英語で授業を受けるのはとても難しいことでした。特に大変だったのはプレゼンテーションでした。ネイティブスピーカーもいるグループでグループ発表をすることになった時、自分なりに準備を重ねたものの発表の中で私が担当したパートだけ拙かったこと、そしてその後の質疑応答が英語力のせいで十分にできなかったことは大きな衝撃でした。内容が頭に入っていたとしても英語で表現するのはどれだけ練習量がいるかを痛感しました。

私はこの留学から多くのことを学びました。二つの授業が私に今までなかった分世界を教えてくださいました。一つは「Law and Governance in Africa」という授業です。これはその名の通りアフリカの法体制と政治です。アフリカでは土着的な法・政治習慣と独立後作られた新政府の法律の摩擦があり、それがアフリカ発展の障害にもなっているという授業でした。アフリカの成文化された憲法は先進国のような民主的なものであるのに、現実には慣習法が人々の生活を支配していること、またその中で国際社会において求められる人権協約とアフリカの現実（特に女性の権利）をどのように調整しているかというのは興味深かったです。もう一つは、「sharia and national law in Muslim world」という授業です。シャリーアというのはムハンマド時代から続くイスラム教の経典です。これは宗教的なことだけでなく、人々の生活に関する規律も書かれ、イスラム圏ではシャリーアが長い間、そして現在では一部でも法律として使われ、また法律に影響を及ぼしています。もちろん現代国際社会においてシャリーアをそのまま適応することは難しく、イスラム国家それぞれがどのようにシャリーアを適応してきたか、しているかという内容でした。この授業によってイスラムの伝統的な法律があること、イスラム社会独特の課題が分かりました。こうして二つの授業は日本からはなじみの薄い国々のイメージを少しだけ私に与えてくれました。

授業全般として学んだことは、自分からアピールしなければならないということです。いかに英語が下手であっても、黙っていると全く何も考えていないと思われるということ、自分が考えていることを自分の言葉で表現して初めて認められ、機会が与えられるということが分かりました。英語力という点では、日常会話はできるようになりました。でも英語でのプレゼンテーションを質疑応答までするととなると充分ではなく、これからの課題だ

と思います。ただし、英語で話すことの抵抗はなくなりました。

出発前の準備は煩雑でオランダの大学との連絡が取れなく焦ったこともありましたが、一度行ってしまうと多少書類に不備があっても対応してくれました。

次にオランダでの生活について書きます。オランダは先進国ということもあって特別不便に思うことはありませんでした。ただ大学から斡旋してもらったハウジングに住んでいたのですが、その家賃が高い割にキッチン、バストイレが共有でしかもとても汚かったです。ライデン大学には寮がないので仕方ないですが、インターナショナルハウジングは家賃が高い割に汚く設備が悪いので、できたら在住の知り合いに探してもらうか、インターネットのページで探した方がいいと思います。オランダの物価は日用品に関しては日本より安く、ハムとチーズとビールの種類が豊富なのが印象的です。しかし、交通機関と外食は値段が高いです。オランダでは自転車が中心の生活ですが、自転車用道路や自転車置き場などが整備されているのがすごいと思いました。またスキポール空港は設備がとてよく、私が住んでいたライデンからは15分という近さだったので、旅行に行く時にとても便利でした。オランダがヨーロッパの交通の中心になる理由が分かった気がしました。オランダの人たちは素朴で親切で、正直でした。一般的に作り笑いや婉曲表現をしないので時々怖いときもありましたが、その代わり助けるべきという状況では遠慮せず助けてくれる人々でした。麻薬や売春なども合法ですが、日常風景となっているので、危険と感じたことはありませんでした。オランダはヨーロッパの中ではとても安全な国だと思いました。

また、ライデン大学はオランダで唯一日本語学科がある大学で、日本文化に興味を持っている人も多かったです。シーボルトハウスもあり、日本文化が根付いた街という気がしました。現地の日本人コミュニティや日本人留学生と協力して、japanese market というイベントに参加し、カレーを売って売上金を東日本大震災に寄付しました。改めて、この震災は甚大で、世界中に衝撃を与えたのだと実感しました。日本の文化を広められる行事に参加できたことも嬉しかったです。

この留学生活で一番心に残ったのは私が日本人であるということです。海外での長期滞在の中で私は初めてマイノリティになりました。アジア人が珍しい社会でちょっとした差別を感じることもありました。国際社会で単一化と言われても、私はよくも悪くも日本人であり、そう見られていると感じました。また日本のよさも悪さも自分なりに考えることができました。日本にいたら感じるこのできないこの体験は興味深かったです。

今回の留学の反省点は、もっと自分から行動すればよかったということです。友人を作るのも、授業においても、興味や質問があったら自分から動いた方がいいと思いました。行動した時こそ結果が出ることの方が多かったです。また、多様なバックグラウンドの人がいる中で、自分の考えを大切にすることも大切だと感じました。また、留学するなら、1年の方がいいと思います。半年はちょうど帰りたくなってきた所に帰れるという感じですが、やはりやっと慣れた所に帰らなければならないように感じました。反省点を踏まえてもう一学期過ごしたいと思いました。



法学部 4回生 大河原 誠也

留学先大学 ウプサラ大学 (Uppsala University) 【スウェーデン】

学部・学科 Department of Educational Science, Center for Environment and Development Studies

留学期間 平成 25 年 1 月 21 日～平成 25 年 6 月 1 日 (5 か月)

## 研究・学習成果の概要

留学先では本学での法学・政治学とは少し異なる科目を履修し、学問的視野を広げることを目標にしていた。具体的には教育学部でスウェーデンの教育政策および子どもの地政学を学び、加えて環境・開発学センターで Sustainable Development にかかわるプロジェクト・マネジメントというコースを履修していた。スウェーデンで選択した理由として、その福祉国家システムを感覚とともに深く学ぶことであったが、結果的に学習の中心はプロジェクト・マネジメントのコースにあり、その中で計画・実行した「スクラップランチプロジェクト」に時間を割いた。その内容を簡潔に書くと、グローバルな食料廃棄の問題を身近な消費者レベルに落とし込み、消費者の食に関する問題意識の向上と正しい知識の供給によって食料廃棄の問題解決に貢献しようとするもので、具体的にはブログなどのメディアを駆使してレシピ、保存方法など実践的情報を提供しながら、最終的にスーパーマーケットなどから集められた廃棄予定食材を調理してふるまうランチイベントを開催するというものである。結果的に 100 人ほどの学生を呼び込むことに成功し、ランチとともにシェフからのスピーチや簡単なゲームを催し、楽しいだけでなく記憶に残る刺激的なグループになったと自負している。成果として、環境・開発センターでその分野に熱心で問題意識の高い学生とともに対話的な学びをした経験は、自分に「サステナビリティ」という価値を追求していきたいという信念を与え、社会に対する視座が新たに確立されたような感覚をもちらしてくれた。

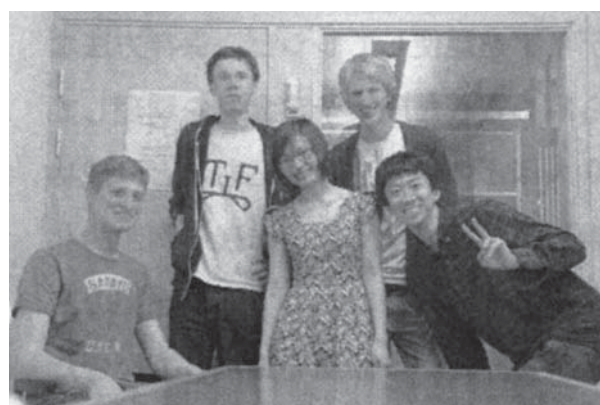


## 出発前の各種手続き、準備

ウプサラ大学は留学生に関するサポートが比較的手厚いと思うので、しっかりと案内に従って着実に各種手続きをすすめれば問題ない。大学関連では正式に交換留学が認められた後、授業の履修登録および居所の選択を行う。授業に関しては到着後の追加も不可能ではないが、手続きが複雑なので幅広い選択肢の中から慎重に（多めに）選択することを薦める。居所については、やはり経験者に話を聞くことを薦める。加えて、スウェーデン移民庁に学生として居住許可の手続きが必要であり、これには十分な資金の証明（銀行の残高証明書など）、大学の正式な受入許可証、パスポートのコピーが要る。手続きはオンラインで行うが、到着後オフィスを訪れて写真と指紋の登録を行い、ようやくカードの発行を受ける。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

僕の留学の目標は、自己を積極的に表現しなければ価値を認めてもらえない環境に身を置き多様な文化や人と関わりながら自己を表現することで、語学力を含むコミュニケーション能力や文化的受容性を高め、最終的に世界を舞台に活躍できるという「自信」を獲得することであった。留学中は積極的に自己を発信することを猛烈に意識し、授業その他のイベントに盛んに参加していたこともあり、語学力が数値としてあがっただけでなく、自分を表現する自己に対する気負いがなくなり素直に自己表現できるようになったと感じている。しかしながら同時に「さらなる努力」の必要性を意識させられる経験が多く、ここで感じた不足をこれからの努力のきっかけ、原動力にしていかなければならないと決意している。これから留学する人には、ぜひ自分なりの「軸」を築いてから向こうにわたってほしいと思う。その軸とは「これをしに行く」という明確かつ具体的な目標であり、これがあることで向こうに行ったときに雰囲気にならずにしっかりと自分のやるべきことを見定めることができると思う。







法学部 4回生 財津 浩之

留学先大学 ローザンヌ大学 (The University of Lausanne) 【スイス】

学部・学科 文学部

留学期間 平成 24 年 9 月 18 日～平成 25 年 5 月 31 日 (9 か月)

## 研究・学習成果の概要

英語・フランス語の勉強のため留学しました。英語は授業外で学ぶことの方が多く、日常会話も専門的な話も、ある程度までなら簡単に聞き取ることができるようになりました。フランス語に関しては、上級者クラスには入れませんでしたが、初級者クラスのフランス語は、もうでき上がっていると、教授に言われました。

## 出発前の各種手続き、準備

わからないことがある時は、実際に留学した人がいるなら、その人に尋ねるのが一番確実ですが、そうでないのなら、留学先の国の日本領事館に尋ねることを強くすすめます。外国の大使館等に尋ねても、正確でなかったり、ひどく手間のかかる方法を教えられたりすることがあります。



経済学部 経済経営学科 3回生 **鈴木 舞**

留学先大学 マギル大学 (McGill University) 【カナダ】

学部・学科 経営学部

留学期間 平成 24 年 9 月 1 日～平成 25 年 4 月 30 日（8 か月）

## 研究・学習成果の概要

私は留学先でも日本で専攻と同じ経営学部にも所属していました。授業は主に経営・経済系をとっていたのですが、外国から見た日本を知りたいという思いから、専門外ではありましたが東アジアの歴史の授業も履修していました。経営系の授業では、どの科目でもグループワークが課され、学期を通して決められたグループでミーティングを行い、プレゼンやレポートを作成しました。グループメンバーは皆それぞれ他のグループワークも抱えており忙しかったので、ミーティングにあてる時間は限られており、とても速いスピードでディスカッションが進んだので初めはついていけず悔しい思いをしましたが、慣れてくると怖がらずに自分の意見を言えるようになり、自分の意見に対する意見も言ってもらえるようになり楽しかったです。皆が熱心に取り組むがゆえに意見がまとまらずぶつかり合うことも多々ありましたが、それを乗り越えてグループで1つの結論に達した時の達成感は素晴らしいものでした。

## 出発前の各種手続き、準備

カナダ滞在期間が6か月以上だったのでビザをとる必要があったのですが、ケベック州は州と国両方に申請しなければならず手間も時間も2倍でした。また、アパートの契約は大家さんがマギルのサイトに出す広告を見て大家さんと直接交渉して行うのですが、マギルのサイト上に「詐欺などの可能性もあるため実際に部屋を見る前に契約・振込などを行わないように」という注意書きがあったため、私は渡航前は見学のアポを取ることにしました。渡航後1週間はホテル暮らしをし、その間住む部屋を見つけましたが、見つからなかったらどうしようという精神的不安は大きかったです。

## 寮生活、その他生活

マギル大学ダウンタウンキャンパスの寮は1年生しか入ることができなかったのですが、私は個人的にアパートを探して1人暮らしをしていました。1人暮らしだと他人のことを気にせずに自分の好きな時間に好きなことができるというメリットはありましたが、家に帰ってしまうと話し相手がおらず、英語の上達や友達作りのためにはやはり寮生活がしたかったなと思います。普段の食事に関しては、外食は高かったため、できるだけ自炊したり友達と一緒に料理したりしていました。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

授業やグループワークに積極的に参加し、日本人としての観点・意見を存分に活かすこと。そして自分とは異なったバックグラウンドを持つ学生の意見を積極的に聞き、自分がそれまで持っていなかった観点から物事を考えること。グループワークで他の学生とディスカッションする機会が多かったので、この目標はかなり達成できたと思います。図書館にこもって一人で黙々と勉強することは日本でもできますが、自分とは違ったバックグラウンドを持つ学生たちと意見交換をしながら勉強することは日本ではなかなかできません。これから留学する人々には、留学先でしかできないことを大切にしながら留学生生活を過ごしてほしいです。



文学部 アメリカ文学専攻 4回生 **西岡 かれん**

留学先大学 マギル大学 (McGill University) 【カナダ】

学部・学科 Faculty of Arts Department of English

留学期間 平成 24 年 9 月 1 日～平成 25 年 4 月 30 日 (8 か月)

## 研究・学習成果の概要

京都大学では、私はアメリカ文学を専攻しています。なので、約 1 年間の留学生活を通して、文学に関しては、American Literature<sup>3</sup>、19th Century American Prose、Studies in 19th Century American Literature という 3 つのコースを取りました。まず、全体的に、日本でのクラスと圧倒的に違っていたのが、授業で読む本の量です。マギル大学の教材には、コースパックと呼ばれる、教授が 1 学期間に使うプリント類をすべてまとめた冊子があり、授業毎に、そのプリント（授業で扱う本に関連した論文がほとんど）を読まなければなりません。それに加えて、1 コースにつき、週に 1 冊程度のペースで読書をしなければならないので、英文を読むことになれないうちは、空き時間はずっと図書館にこもって読書をしていました。

授業の内容は、American Literature<sup>3</sup> だと、アメリカの現代作家たちの作品を読み、アメリカの社会や、家族の現実について考えました。Octavia Estelle Butler、Junot Díaz、Joan Didion などの作家の作品を扱い、そのほとんどがアメリカの移民問題などに関する内容でした。現代文学の中でも、政治問題を扱った作品などは読み解くのが困難でした。19th Century American Prose では、アメリカを代表するような作品を多く読みました。『ハックルベリーフィンの冒険』『デイジー・ミラー』『エイジ・オブ・イノセンス』『アンクルトムの小屋』『森の生活』『草の葉』など一連の作品から、アメリカ文学の根底に流れる純粋さ、というもののテーマについて深く考えました。京都大学の授業では、1 学期間かけて一つの本を精読するというスタイルが多く、それもとて興味深いのですが、この授業では、多くの作品を、広く浅く、というスタイルで読むことにより、一つの時代の作品の共通点、違いなどに目を向ける、よりダイナミックな視点を持たせたと思います。Studies in 19th Century American Literature でも、19th Century American Prose と似たテーマでの学習をしました。しかし、この授業では、ホーソーン、ポー、メルヴィルなど偉大な作家たちの短編にフォーカスした内容を学習しました。

また、京都大学の専攻とは少し違った分野になるのですが、film studies の授業を多く取りました。Film Movement or Period では、アメリカの 1950 年代の映画、テレビ番組に関して学び、時代や文化に沿って映画を読み解く方法を身につけました。また、50 年代という時代がいかに「アメリカ的」な文化を持つのか、ということについて、マリリン・モンローなどその時代を代表するセレブリティの役割などを通して考えました。Introduction to Film Studies では、カメラアングルや、mise-on-scene と呼ばれる場面の構成など、映画を製作する側の手法についてまず学び、そのあとに、ミュージカル、西部劇、メロドラマなどジャンル別に映画を分けて、それぞれのジャンルにどういった特徴があるのかを学びました。Studies in the Hist of Film 2 では、アメリカの戦争映画について学びました。『プライベート・ライアン』『ランボー』『フルメタル・ジャケット』『ディ

ア・ハンター』『我等の生涯の最良の年』『帰郷』などの映画を観ました。戦争映画の中で、特にホームフロントと呼ばれる、戦場ではなく、戦争後のアメリカの家庭と、帰還兵社会への適応をテーマにした映画に興味を持ち、そのことでレポートを書きました。Film Genre ではミュージカル映画について学び、ミュージカルが体現する「ユートピア」空間について、分析しました。また A Film-Maker 1 では、ビリー・ワイルダー監督の映画について学びました。この授業では、映画の一場面一場面を丁寧に見、その中に出て来る縦線、横線（ブラインドから差し込む光や、階段、オフィスの風景など）から、男性性、女性性、権力関係などを読み解きました。Film studies という分野は、京都大学の文学部ではあまり扱われていないため、私にとっては新しい分野でした。北米では、日本よりも、映画をアカデミックに読み解いてゆくという分野が発達しているのではないかと感じました。French As s Second Language というクラスも取り、フランス語を学びました。私にとっては、母国語でない英語でフランス語の授業を受けるのは、かなりの挑戦でした。このクラスでは、ランゲージラボという自習室の利用が可能で、パソコンを使い、リスニングやスピーキングの訓練をすることができました。また、文学と映画の授業とともに、授業の他にコンフェレンスという時間がありました。コンフェレンスとは、生徒と TA (Teaching Assistant) のみで、授業で扱った本や映画について話し合う時間です。教授が立ち合わないということもあり、授業でよりも、気楽に発言することができます。その場では、色々な人たちの自由な意見を聞くことができ、考え方の幅が広がりました。また、始めは手を挙げて、英語で発言することが難しかったのですが、何度も回を重ねるうちに、コンフェレンスや授業で発言することが出来るようになりました。誰かの意見に対して、素早く反応し、その流れに沿った発言をすることも覚えました。

マギル大学では、一つのコースを取ると、その授業がコンフェレンスも含め、週に3回あるので、同じテーマに沿った体系的な学習が可能でした。

全体的に、マギル大学で要求される学習量は、京都大学のそれよりも多く、レポートや試験に常に追われているような状態でした。授業で、Facebook のグループやブログなどを作り、授業の内容に関するコメントや記事をアップするなど、定期的に更新をしなければなりません。SNS など、最近の流行のメディアを使い、流行語やスラングなども交えてより生き生きとした形で、授業に参加することができ、とても楽しい経験でした。

読書、英文を書くスピードが早くなりましたし、常に勉強している内容について考える癖ができました。学習成果は計り知れないほどありました。

## 出発前の各種手続き、準備

2学期間に渡る交換留学だったので、ビザの申請をしなければなりません。ケベック州、カナダと両方のビザを取らなければならなかったため、思ったよりも時間がかかり、苦労しました。また、銀行口座の証明書など、思わぬ書類の提出を求められ、必要書類をそろえるのに苦心しました。こういった手続きは、早めにしておくべきだとつくづく感じました。また、住む場所などは、日本にいる間にマギル大学のホームページから探し、契約も済ませていきました。授業登録なども、早めに始まっているので、大学のホームページや、MyMcGill と呼ばれるページはこまめにチェックしていました。寒い地域だったので防寒具なども少しそろえました。



## 寮生活、その他生活

マギル大学は、1回生のみ寮に入れるシステムなので（ダウンタウンのみ）、3回生の私は、寮を希望したのですが、認められませんでした。できるだけ寮生活に近い生活をしたいと思い、大学の近くのタウンハウスでハウスシェアをしていました。マギルの正規生、交換留学生を含め、9人で生活をしていました。各自部屋はあるのですが、キッチン、バスルームなどが共用で、ソファなどがあるコモンスペースもありました。インターナショナルな生徒たちと、生活を共にすることができ、食事を一緒に作ったり、家で一緒に勉強するなど、楽しい経験ができました。日本ではアパートでの一人暮らしに慣れていたので、始めは生活音など、他人と住む上で気を遣うこともありましたが、最終的にはとても良い経験になりました。また、生活は基本的には勉強中心で、図書館もよく利用しました。

## 留学中の問題点・困難な点

英語とはいえ、やはり、母国語ではない言語での授業についていくのは、始めのうちはかなり厳しかったです。また友だちを作るのも、自分からイベントに行くなど行動を起こさなければ友だちは出来ないのでは、大変でした。新しい土地で一から生活を始めるので、落ち着くまでは、例えばどこで買い物をすればいいのか、など色々分からないことも多かったです。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

留学の目標は、多くの国の人と関わり、グローバルな考え方を身につけること、色々な価値観にふれ、人間としての幅を広げること、そして、勉強に集中して、自分の好きな研究分野を見つけることでした。これらの目標はおおむね達成されたと思います。特に、映画学の授業を取り、夢中になりました。アドバイスは、まず、準備は早く始めるに越したことはないということです。また、自分なりの目標をまず設定した方がいいと思います。留学中は、色々なことに圧倒され、周りに流されやすくなってしまうかもしれませんが、その中で、自分がやりたいことをやる力を持つことは大切だと思います。





ISM (International Student's Ministry) というマギル大学の学生団体のみんなと





理学部 生物専攻 4回生 四方 純

留学先大学 コンコルディア大学 (Concordia University) 【カナダ】

学部・学科 理学部

留学期間 平成 24 年 9 月 4 日～平成 25 年 4 月 30 日 (7 か月)

## 研究・学習成果の概要

全般的に非常に新鮮な体験でした。

概要としては京都大学で学んだこと以外の内容の講義を、コンコルディア大学での学年に関係なくとるということをしていました。

コンコルディア大学ではフルタイムの学生としては一学期に 3～5 個の講義をとります。そして一講義につき、平均で週 4 回ほどの授業があります。

内約としては

- ・ 通常の講義 (2 コマ) 1 学期でおおよそ 26 回の講義
- ・ TA による演習 (1 コマ)
- ・ 担当教諭と TA による実験またはコンピュータを用いた演習 (1～3 コマ)

のようになります。このような構成では一学期 5 つの講義で単位を取得することは一般に困難で、周りの級友たちは平均 4 講義で単位を取得していたようです。

しかし、このように 1 講義の内容が濃いことで、一人の担当教諭が包括的にその分野についてカリキュラムを決めて、より完成度の高い学問体系を学生に提供していたと思います。

もちろん、4 回生配当の講義では講義内容も、実験レポートも大変厳しく、私は全てに参加したものの単位取得はできませんでした。英語での口頭発表や、実験など非常に有益な経験ではあったものの、単位が取得できなかったということはその内容を吸収できなかったということであり、非常に残念です。

しかし、2 回生配当の講義ではすべてのカリキュラムに参加すれば A+ を取ることができました。この差こそがカナダ、アメリカに共通する大学のカリキュラムの優れた点だと思います。2 回生、3 回生、4 回生と徐々に求められる勉強時間、ラボでの努力のレベルを上げていくことで、かなりの割合の学生が厳しい講義内容についていけるようになっていました。

たとえば 2 回生配当講義の単位取得に必要なものを 1 つの例を取って挙げると

- ・ 中間テスト 2 回
- ・ 期末テスト 1 回
- ・ 演習で毎回行われる小テスト
- ・ 演習で毎回提出するレポート

となります。

これに比べて4回生担当の講義

- ・ 中間テスト2回
- ・ 期末テスト1回
- ・ 一人20分の口頭発表
- ・ レポート課題2回
- ・ 実験内容についてのレポート6回
- ・ 実験内容をまとめた実験ノートの提出

となり、実験も一回5時間あまりの本格的なものになります。

他の実験のない講義でも演習は必ずしも存在し、毎週の問題演習と口頭発表がありました。

3回生、4回生向きの講義では、ほぼすべてで口頭発表があったのですが、このレベルも非常に高く、言語の問題だけでなく、技術に大きな差を感じました。この差の原因はやはり経験だったのだと思います。

コンコルディア大学の学生たちの自然でわかりやすいプレゼンテーションは本当に刺激になりました。プレゼンテーション後の討論でも非常に活発に議論が交わされ、どれほど白熱した討論でも感情で攻撃的にならない技術というものも目の当たりにしました。

## 寮生活、その他生活

私は一般のおうちの空いた部屋に下宿させてもらっていました。普段のごはんや洗濯、掃除などはすべて各自自由に行い、Thanks giving やクリスマスなどは家族のイベントに交ぜてもらって、皆で食事とおしゃべりを楽しみました。

特にクリスマスは、家族の方々がクリスチャンであったこともあって、非常に伝統的なクリスマスですごくごく貴重な体験をさせていただきました。

## 留学中の問題点・困難な点

やはり大学での友達作りが一番難しい問題でした。

普通に講義を受けているだけではクラスメートとしゃべったりはできないので、演習でのグループワークや、実験などで一緒になった人と主に友達になりました。

大変なのは実験や演習もないクラスです。そのようなクラスでは知ってる人が誰もいない状況でテストやレポートに臨まなければならないので、他のクラスに比べて情報も少ない状況下でのテスト勉強は大変でした。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

当初の目的はカナダの人たちとコミュニケーションをとれるようになることと、文化も宗教も違う人を知ることとで自分を知ることだったように思います。その点においては八割の達成率であると思います。

これから留学する人へは学校以外にもコミュニティを持つことをお勧めします。私の場合は社会人クラブでバ

ドミントンをやっていました。

社会人クラブということで 15 歳くらいから 60 歳くらいで、年齢も人種も職業も違う人が集まってきていていろんな人と話せますし、友達になれます。週末には試合のためにケベックシティまで遠征してホテルで泊まって合宿のようなことをするなど、本当に楽しかったです。

学生だけでもすごいバラエティに富んでいましたが、バドミントンクラブにはカジノのディーラーとかスポーツカーのレーサーなど、比べものにならないバラエティでした。

街の人たちとふれあうという意味でも学校外のコミュニティを持つことを強くおすすめします。





農学部 食料環境経済学科 4回生 和田 沙紀子

留学先大学 ウォータールー大学 (University of Waterloo) 【カナダ】

学部・学科 Faculty of Arts

留学期間 平成 25 年 4 月 29 日～平成 25 年 9 月 6 日 (4 か月)

## 研究・学習成果の概要

Organizational Psychology

Public Speaking

Environment and Development in global perspective

上記3つの授業をとりました。

もっとも自分を成長させることができた授業は Public Speaking です。自分はプレゼン能力に不安を感じていたため受講しました。専攻分野を問わない授業内容なので、Waterloo に今後留学する学生がいればぜひ進めたい授業です。この授業では、一学期間に Impromptu speech (その場でテーマが決まる 1 分程度の即興スピーチ) を 5 つと、5 分程度の準備の必要なスピーチを 3 つ行います。後者のテーマは、スピーチのフォーマットに合わせていけばよく、テーマは自由です。私はこの授業のおかげで、英語を通して自分を表現することになり自信ができました。中でも、最後の Entertaining speech においてうまく笑いをとれたことで、自分のユーモアセンスが海外の人にも通じたという感動を覚えました。

行うことは Speaking ですが、事前に原稿を練ったものを発表するので、伸びる英語のスキルとしては Writing に近いものがあります。また、他のクラスメイトの様々なテーマの発表を聞くことも自分のスピーチと同じ位興味深いものでした。生徒による相互評価システムがあるので、聞き手に回っても授業に積極的に参加することができます。

この授業の充実度は担当する指導教員によりばらつきがあるようです。私の場合は Jeff 先生というとても良い教授でした。彼はスピーチを通してクラス内の雰囲気をつましく作ってくれましたし、私に対して語学力のハンデに配慮をしてくださって非常に助かりました。クラス内も仲良くなりやすかったです。

自分の専攻分野に最も近い授業が、Environment and Development in global perspective というものでした。授業は、環境問題を考察するいくつかの理論的な視点を紹介する部分と、それを実際の問題に当てはめる実践的な部分で構成されていました。前者は具体的には Market environmentalism, Institutionalism, Risk perception, ecological ethics, political economy, social construction です。担当教授がフードシステムの研究をされていることもあり、後者の実際の問題例で、たびたび食や農業の問題が取り上げられました。また、食や農業に関する活動を行っている団体の代表の方がゲストスピーカーとして呼ばれることもありました。この授業では、カナダの農業観が日本の農業観とかなり異なったものであると感じました。その違いや原因について知ることができたのは非常に有意義でした。

Organizational Psychology は専攻とは関係なく趣味でとった授業です。授業のなかで興味深い実例や新しい研究が Video で紹介されることがありますが、課されることは教科書と授業の内容を覚えることが中心です。おそらく Waterloo の心理学専攻の学生であればカリキュラムの一環なので大量の用語 (Facts and figures) を覚えることが今後の学習のためになるでしょうが、趣味としてこの授業だけ受講した自分にとっては、暗記する動機に不足していました。ただし、この授業のグループワークは興味深いものでした。実際に企業のアイデアを学生たちで練り、各職種の担当者を、性格テストなどに基づきメンバーの中で決めます。周りの学生たちが非常に手馴れていたことが印象的でした。グループワークを円滑に進めるための工夫をそこで学びました。

以下ふたつが、受講を検討した授業です。最初の 1、2 回出席しています。

#### Sustainable development for business

企業が環境保護するために実際何をしているか、ということがメインテーマの授業です。扱う内容が実践的すぎるために、カナダ人でない自分は授業についていくためにカナダの商慣習や法律などを学習する必要があるように思われました。これは自分が期待していた勉強内容からは少し外れると思ったので受講しないことに決めました。企業の環境保護および CSR 担当者になることを考えている学生が周りに多かったです。実際に同様の仕事をしている人が頻繁にゲストスピーカーとして来る予定でしたので国内の学生には魅力的な授業だと思われます。

#### Statistics for economics major student

授業中に扱う統計ソフトが京都大学で使用できないこと、京都大学でも後期に英語で統計学の授業が取れることなどから受講しないことに決めました。

時間数の多さ以外に提出課題が毎週あり、テスト・グループワークによって成績がつくので、一つ一つの授業内容が濃いです。

IT に強い大学らしさの一つだと思いますが、個人用授業サポートサイトが非常に充実していたことに驚きました。まず、パワーポイントによる講義であれば、必ず授業前に各サイトに配信されます。このことから、スライド内容を暗記することで得られる以上の価値を授業で提供するというメッセージを感じました。京大でもそれぐらいの自負をもって提供される授業が増えることを願います。また、毎週の課題の提出やミニテストなどもサイト上で行うことができます。さらに、その授業に出席していれば、他の受講者と教授・TA の学内メールアドレスをサイトで調べることも可能ですから、授業内の活動で急きょ連絡を取りたいことが出てきたときも対応できます。

ISO (International Student Office) において、Writing tutorial という、授業課題などの Writing を 1 対 1 で添削してくれるサービスがあります。ある程度自分の時間に合わせてインターネット上で予約が取れるので、重宝していました。

## 出発前の各種手続き、準備

手続きの時間は十分に取られていました。インターネットの手続きサイトが充実していたためそれを良く読み込むことで準備ができました。春学期 (5 - 8 月) からであれば住居の確保に困ることはないでしょう。ほかの学期は学内の寮がすぐ予約でいっぱいになるようです。

## 寮生活、その他生活

コロンビアレイクビレッジというシェアハウスでした。大学の建物ですが、一戸建て。一階部分は共同スペースでキッチン・リビングダイニングがあり、二階に6帖程度の個室4人分とバスルームがあります。自炊ができます。オーブンが備え付けてありますが、電子レンジがありません。これは個人的には不便でした。食器はシェアハウスの管理所のような場所から無料で借りることができました。なんとその中に炊飯ジャーもありました。見つけたときは嬉しさのあまり叫びました…。

ハウスメイトはドイツ人でした。一緒にバーに行ったとき、彼女はドイツ人らしく、おつまみなしで際限なくビールを飲み続けていました。一緒に旅行に行ったりしました。私は特に彼女と共同生活をするうえで困ることはありませんでしたが、最後の3日間だけ彼氏が本国からやってきて隣の部屋やキッチンでいちゃいちゃされたので困りました（笑）

（ちなみに契約者以外の人を2日以上泊めるのは規約違反なので、追い出してよいそうです）

大きめの食品・日用品スーパーが歩いてシェアハウスから8分ほどのところにあります。

ネットワーク環境

学内の建物の中はほぼすべて Eduroam が使えるので、ネット環境には困りません。コロンビアレイクビレッジも大学所有なので Eduroam が使えて便利でした。

University of Waterloo の学生は市バス無料です。

## 留学中の問題点・困難な点

授業の英語は聞き取りやすく、また内容も事前に配布されるスライドのデータを見られるため追いやすかったが、カジュアルな場で話される英語は聞きづらいことがしばしばあった。特に、いろいろななまりやネイティブの速度に慣れていなかった。

ネイティブの速度に関しては、現地生活を続けるうちに、また練習のため聞いていたポッドキャストを1.5倍速で聞くことでやや慣れていった。なまりもある程度慣れた。ただし、聞き取れるようになってからも、その速い会話にあった店舗で応答を返すことは最後まで難しかった。

当初と学びたい方向性がやや変わったこと、また夏学期で開講される授業数が少ないことから、興味に当てはまる授業をとりづらく、また学問的な内容をディスカッションできる人を周囲に見つけづらかった。1つ当てはまる授業が前述の Environment And Development であったが、もう一つとれるとなおよかった。また、経済系の授業をとるという選択肢を検討してもよかったと思う。学友の存在は、みずからサークルを探すという手もあったかもしれない。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

勉強と社交が目標と言っていました。勉強としては、英語をふくめ現地のコミュニケーションスタイルを体得すること、およびカナダの農業や食を日本のものと比較して考察を深めることの2軸がありました。社交は勉強

の1軸と重なりますが、現地でいろいろな人と話し、特に親しい友達を作りたいという思いがありました。

勉強の1軸目はある程度達成できたと思います。リスニング能力・ライティング能力が伸びた実感が大いになりました。また、プレゼンテーションの場を多く得たことで苦手意識が解消され、アカデミックなグループワークも流れを理解し前より積極的にかかわれるようになりました。

ただ、TOEFLの点数上の伸びは思ったよりも小さいものでした。半年程度の留学で英語力の上昇をあまりあてにすべきではないという忠告はたびたびあったので、その通りだとは思いましたが、やはり悔しい思いをしました。

カナダの食や農業を日本と比較することは、ウォータールーでの授業、日常的な生活、また日本で個人的に紹介していただいた先生を訪問することやアルバータの実習に参加することによって達成できました。農業や経済政策など、国ごとの地理歴史的・文化的な差異が影響してくる分野を学ぶ人であれば、実際の違いにただ触れるだけでも非常に刺激的で、深い洞察を得られます。これだけでも留学する価値があったと本気で感じました。

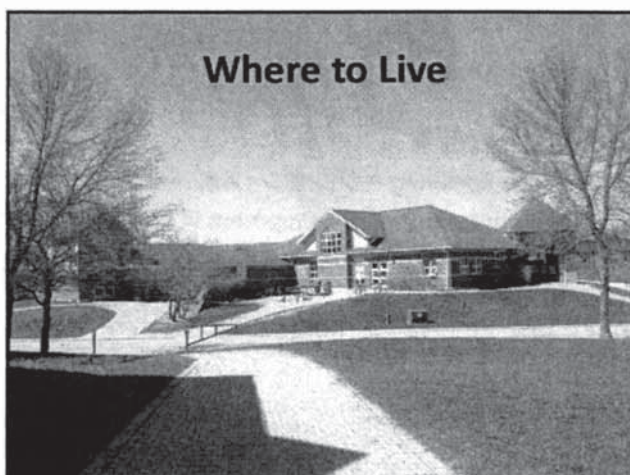
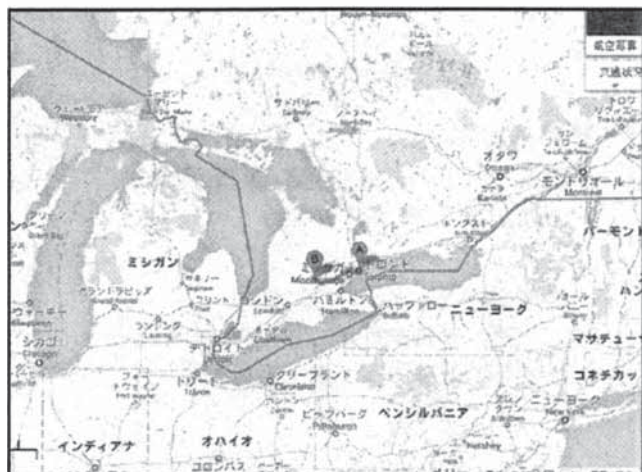
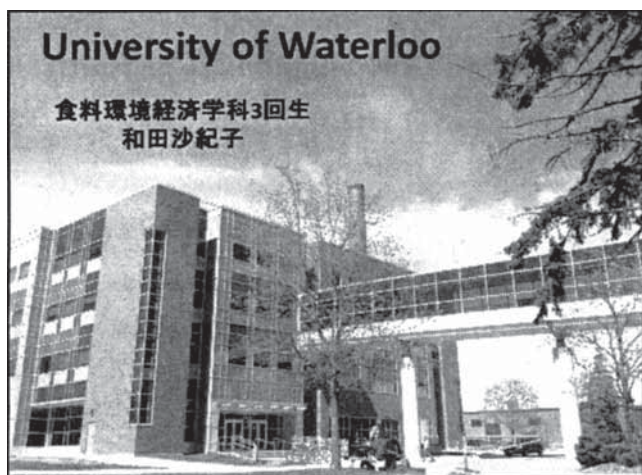
「社交」は結果的には広く浅くという形であったと思います。いろいろなコミュニティに入り、日本での生活と比較して、かなりいろいろな場所に遊びに行きました。その中で独特の集団内文化に触れることもあり異文化を感じるうえで有意義でした。たとえばよく遊んでいた中国人のコミュニティでのことです。互いが直接的に知らないような団体でも、中国人内の何らかのネットワークによって互いに信頼し合っており、ビーチへのドライブ旅行が20人規模で実現していました。また、会合費は割り勘ではなく順番に待ち回りで主催者が払うという流儀がありました。

一方で、特定の活動に深くコミットするということがあまりなかったので、ややさみしい思いになることもありました。

また、そこそこ親しい人はいましたが、だれに対してもある部分で心理的な壁があったようにおもいます。言語的なハンデをカバーするレベルの魅力を自分の中に持てていなかった、あるいは見つけられなかった。また、自分が相手を深く知ることがもともと得意でなく、言語ハンデを伴うとさらに難しくなったためかもしれません。

留学は予想できないものに出会うために行くという面はあります。ただ、ある程度は具体的な目標を優先順位に基づいて決め、そこまでの道筋を描くことをしたほうがより達成感のある留学体験になると思いました。また、目標は現地でも定期的に点検し、ライフスタイルレベルに落としこむとよいのではないかと思います。







## Colombia Lake village (CLV) South



## Colombia Lake village (CLV) South



1階

リビングダイニングキッチン

2階

個室×4

トイレ・シャワー



## Study in UW

### 授業・学習

- 理系・IT系が特に強い
- 専門以外にも幅広く授業をとることが可能
- English for foreign language の授業もとれる

- 直前に興味ある分野が変わっても対応可
- 授業を受けてからでも変更可能

## Study in UW

### 授業のとりかた

- 授業一つあたり週3時間+課題(大量)
- 金曜開講の授業は少なめ
- 交換留学生: 週3コマ前後  
- ただし、事前申請は5-7科目行っておく
- ちなみに正規学生: 週5コマ前後

## Study in UW

### 私のとった授業

- Public Speaking=プレゼン・スピーチスキル↑
- Environment and Development in Global Perspective=専門(食料環境経済学)に近い!面白い!
- Organizational Psychology=暗記中心?

## Agriculture and Food system in CANADA

- The Class
- Cooking and shopping
- Farmers' markets(in St. Jacobs, Kitchener)
- Field study in Guelph and Niagara
- Field study program in Alberta

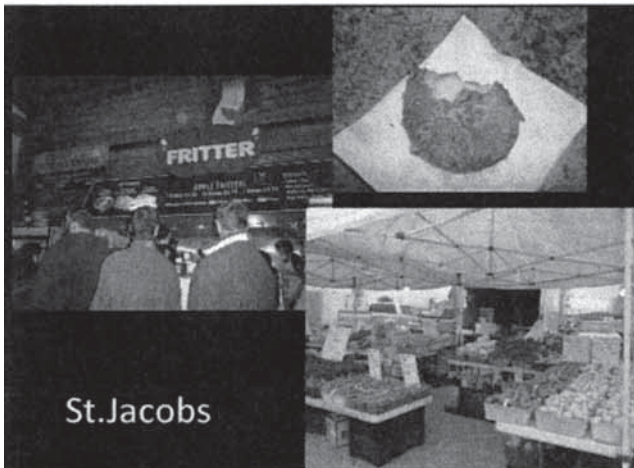
## Tips about Food in CANADA

- The Class
- Cooking and shopping
- Farmers' markets (in St. Jacobs, Kitchener)
- Field study in Guelph and Niagara
- Field study program in Alberta

↓  
実は食費が日本より高い(牛肉など一部を除く)  
ファーマーズマーケットがスーパーよりお得 かも



The Field Trip in  
the Organic Farm

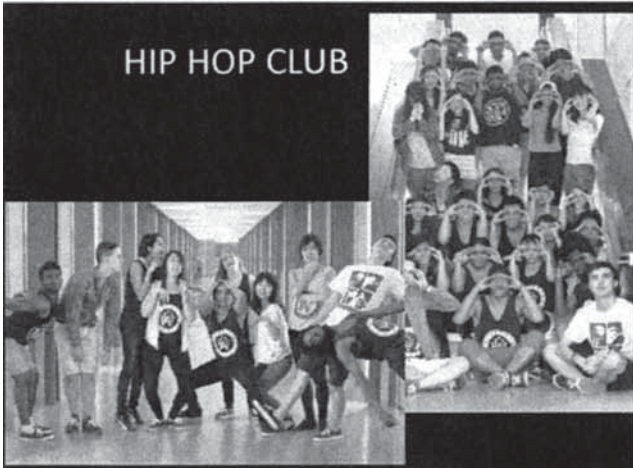


St.Jacobs

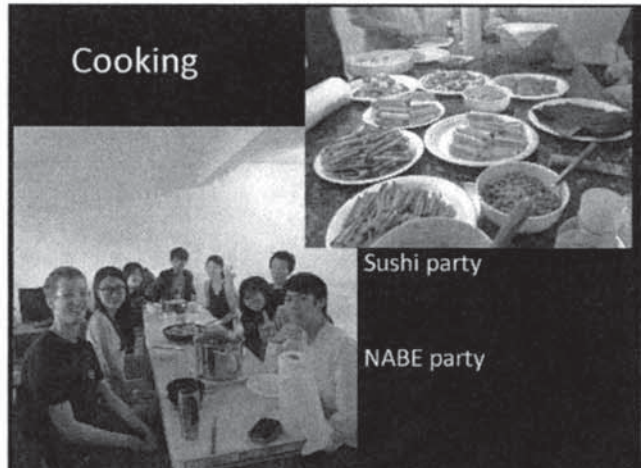
課外活動

## ACTIVITIES

## HIP HOP CLUB



## Cooking



Sushi party

NABE party



イギリス系とフランス系住民共存の歴史  
違いが存在することは自然  
留学生でも外国人扱いされない

→多文化共生の実践

Think outside the box to understand  
the big and diverse world.

The importance of the view as a  
stranger to rethink our own culture.

それでいて、

カナダ国民としての愛国心や一体感はけっこう  
強い

→日本と対照的



## ほかに

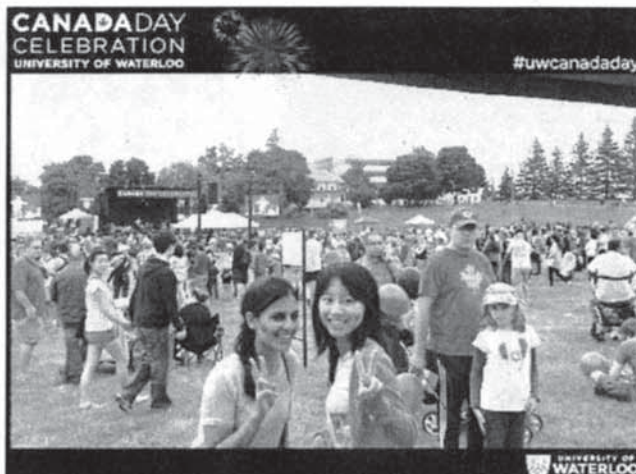
- Global Café
- Konnichiwa Japan(KonJa)
- International Peer Mentors Program

Club, Circle はどうやって入る？

- Club days2日間(合同説明会)
- 留学前から情報をHP,FBなどでGet

カナダで学ぶ幸せ

**CANADA DAY**





人間 環境学研究科 共生文明学専攻修士2年 藤井 隆宏

留学先大学 浙江大学 (Zhejiang University) 【中華人民共和国】

学部・学科 公共管理学院

留学期間 平成24年9月1日～平成25年6月30日(10か月)

## 研究・学習成果の概要

現地調査を行うために交換留学をした。大学を頻繁に離れることになるので講義の登録は行わなかった。大学院生なので、留学先で指導教官をつけてもらい、彼の指導のもと調査を行った。留学初期は語学力向上のため中国語のクラスを受講し、それ以外には指導教官の行うゼミと専門である人類学の授業に出席した。その後は文献研究と調査を平行して行い、12月ころからは調査を中心に行い、月に一度調査の報告を指導教官に行った。専攻する文化人類学は、直接観察により得られた慣習的行動を分析する学問で、私の研究テーマは「中国福建省農村地区の観光開発と住民対応について」。観光開発が急速に進む中国福建省の農村地区をフィールドに開発と政策の関係性、そして生活が変化する中で住民がどのように対応しているのかを調査を行っている。経済、政治、文化といった枠組みにとらわれず住民の具体的な行為を通じて変化を記述することが目標である。

## 出発前の各種手続き、準備

留学先の半年間は中国語の学習を重点的に行い、現地に行ってから速やかに研究を開始できるようにした。出発前のビザの手続きを行い、現地でどのような手続きが必要かを精査した。入学手続きは、大学の性格上、速やかに完了させることはできないが、煩雑なことは無かった。

## 寮生活、その他生活

寮は留学生向けのもので一人部屋。非常に快適で設備も近代的だが、中国人の学生とは違う寮であることが不満。大学内での生活はいたって平穏で、反日デモ等で困ることは無かった。調査で農村部に滞在することも多かったが、現地の人々はとても親切で環境は劣悪だが危険なことは少なかった。

## 留学中の問題点・困難な点

語学は永遠の課題。いくら勉強をしてもネイティブとの差は明らかなので、勉強だけでなく生活そのものの中で使用することが重要。特に留学所期はゼミでの発言や調査地でのコミュニケーションに苦勞した。金銭面は現地でクレジットカードが使えると考え、多く持っていかなかったが、クレジットカードATMが少なく、まだ学



生だと制限金額があり結局親に送金してもらった。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

当初の目標は、中国の農村の観光開発と言う現象を現地調査により精緻に描き出すこと。その過程では現地に深く入り込むことが必要となるが、細かな人間関係の把握、慣習的行動の観察、日常会話の聞き取り等十分に行えていない課題も多い。調査の鍵は人間関係の構築であり、これは調査に限らず留学全般に言えることであると思う。私が言うことができるアドバイスとしては、留学先では国際交流、異文化交流というような枠で活動をするのではなく、現地で日常的な生活になじむことで生の感覚を実感することができるということです。



文学部 人文学科 歴史基礎文化学系 日本史学専修 3年 神山 侑衣

留学先大学 シンガポール国立大学 (National University of Singapore) 【シンガポール】

学部・学科 Faculty of Arts and Social Sciences

留学期間 平成 25 年 1 月 7 日～平成 25 年 5 月 16 日 (4 か月)

## 研究・学習成果の概要

今回、私が留学した目的の一つに「外国から見た日本、アジアにおける日本の位置を知る」ということがあり、そのために、すべて日本に関係する授業を履修した。すべての科目が週 1 回の講義、隔週 1 回のチュートリアル(15 人程度)で構成されていた。各授業にリーディングを中心とした予習が課されており、自習時間は主に予習に費やした。予習をしておかないと、いくら日本に関係することを学ぶといえども、授業についていくのが難しいと思ったからである。

以下、各授業の内容と成果をまとめた。

### ① Itadakimasu-Food In Japan

講義はリレー講義であり、基本的には NUS の先生方の講義だが、時には日系企業の社長の講義もあった。「日本の食」について、文化・歴史・経済・グローバル戦略など様々な角度からのアプローチを学んだ。日本食については詳しく知っているつもりであったが、外国の人が日本食を、さらにそれを通して日本文化をどのように見ているのかを学ぶことができた。チュートリアルでは、講義に沿った内容で、ディスカッションやディベートを行うとともに、各自でグループワークもすすめた。私のグループは、「学内に食堂があり、近くにコンビニがあるにも関わらず、なぜ日本の大学生はお弁当を作って持っていくのか」というテーマで研究を行った。最終回ではそのプレゼンテーションもあり、今まで身近に思っていた日本の食文化の奥深さを知ることができた。

### ② Japan and Singapore

講義では、日本とシンガポールの関係について、前半は歴史、後半は政治・経済と 2 つの側面から学んだ。授業ではクリッカーが多く用いられ、現在の NUS 生のもつ 2 か国の関係性についての生の意見を聞くことができ、大変興味深かった。チュートリアルでは、講義で学んだ内容をもう 1 歩踏み込んで考えるための質問がチューターによって用意され、毎回何人かの学生がファシリテーションをしながら解答を考えるというものであった。また、この授業でもグループワークがあり、テーマは戦争を取り扱った博物館についての考察であった。実際に日本のシンガポール占領についての博物館を見学するのは初めてのことで、精神的に苦しかったり、シンガポール人学生に対して意見を言いづらかったりもしたが、自分の知らない日本の歴史を知ることができたのは良い経験となった。

### ③ From samurai to Sony : History of Japan

講義では明治維新から現代に至るまでの日本史を学んだ。先生は日本人の方であったが、日本史を世界史の中に位置づけて考えるという新しい視点を学ぶことができた。チュートリアルでは、講義にそって、教科書以

外に授業で指定されたテキストを1冊読んだうえでディベートを行ったり、様々なドキュメンタリー映画を見たりうでのディスカッションを行った。また、個人での小論文課題も2本課された。1本目は日本の明治維新を他国の政治改革との比較、2本目は他国における戦争の記憶の扱い方がテーマであり、今まで自分が学んできたのとは異なる方法で日本史を学ぶことができ、とても面白かった。

## 出発前の各種手続き、準備

- 2011/09 西安交通大学サマースクールへ参加。初めての留学で、様々な刺激を受け、アジアに留学することを決める。しかし、具体的なことは全く決められなかった。
- 2012/03 留学応募開始の告知に気づき、それから準備を始める。春休み期間であったため、申請の際の必要書類である先生方からの推薦文や語学証明書を受け取るのに苦労した。
- 2012/04 学部での応募締切当日に書類はすべて提出できたが、TOEFL スコアは間に合わず、後日提出した。
- 2012/06 学内選考通過の通知を受け取る。
- 2012/09 シンガポール国立大学（以下、NUS とする）へオンラインでの申請を行う。当然であるがサイトはすべて英語のためとても戸惑った。当初は中国語の授業を履修することも考えていたため、中国語の語学証明書を添付せねばならなかったが、システムが少し複雑でなかなかうまくいかなかった。この時点で自分の履修したい科目を少なくとも6つ決めて申請せねばならなかった。（実際は留学が始まってからも変更可能であったが）
- 2012/11 NUS より留学正式許可の通知を受け取る。以降、寮の申し込みや学際ビザ申請についてなど様々な連絡がメールで送られてきた。
- 2012/12 滞在先となる寮が決定する。学生ビザの申し込みや必要書類の準備、支払いがやや分かりにくかった。また、語学力向上のため IELTS と HSK4 級を受験し、HSK は合格した。
- 年末には Japanese Studies Society からバディプログラムの連絡や、到着時に空港へ迎えに来てくれるバディの連絡、また留学生向け新歓イベントやホストファミリー制度の連絡も届いた。
- 2013/01 シンガポールへ出発する。

## 寮生活、その他生活

寮は NUS Kent Ridge Campus University Town 内にある UTown Residence（前・Graduate Residence）を選んだ。University Town とは、2年前にオープンしたばかりの区域であり、多くの留学生が暮らす5つの寮や2つの食堂、ジム、プール、自習室、24時間営業のスターバックスやコンビニなどの集まった街のような場所である。学部棟まではキャンパス内シャトルバスで5分、徒歩で15分という立地の良さも決め手の一つとなった。

UTown Residence は昨年度 NUS に交換留学されていた先輩の勧めで決めた。4人で1部屋に住み、シャワーとトイレ、キッチン、リビングを共有するが、個人部屋もそれぞれ持つことができる。「外国の人と住む」ということが初めてで最初は緊張したが、最終的には仲良くなり、ご飯を食べに行ったり、誕生日祝いをしたりもした。University Town 内の他の寮には、入寮のときに一括払いして朝ご飯と夜ご飯寮内で食べることできる「ミールプラン」があるが、なぜかこの寮にはミールプランがなく、毎日寮外の食堂に食べに出なくてはならず、やや

不便に思ったときもあった。しかし、総じて、とてもよい寮、寮生活であったと思う。

また、NUS Jazztitude というジャズダンスサークルにも所属した。ほぼ全員が NUS の正規学生であったが、あたたかく迎えてもらい、週 1 回のレッスンを楽しむことができた。授業だけでは出会えないような他学部・他学年の学生とも仲良くなることができた。

## 留学中の問題点・困難な点

- ・学生ビザは、オンラインでの手続きののち、現地で書類を提出して約 2 週間後に発行されるため、入国の際の身分証明や銀行口座を作るときに少し手間取った。
- ・寮の支払いが現金では不可能であった。クレジットカードまたはオンラインでの決済になる。
- ・食べ物は基本的にはおいしいが、脂っこいものが多い。また寮にコンロがないため、自炊することができなかった。
- ・Old generation と呼ばれる人々（大学生の親世代以上の人々）は英語があまり通じない人が多いように思った。彼らは主に中国語を話していた。私自身は中国語を第 2 外国語として学んでいたのであまり抵抗はなかったが、全く知らなければお店でのやりとりが少し大変だと思う。
- ・周りの学生がとにかく勉強熱心だったため、最初は授業についていくのに非常に苦労した。もっと能動的に、積極的に授業に参加しなければならないと痛感した。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

### ●目標

- ① 全く新しい環境に行くと自分はどう行動するかを知る
- ② 国際交流とは何か、自分なりに答えを出す
- ③ 外国から見た日本、アジアにおける日本の位置を知る
- ④ 語学力を向上させる

### ●達成度

- ① 初めての一人暮らしであったため、最初は孤独を強く感じたが、友達ができるのにつれてそれも薄れ、2 週間ほどで現地の生活に慣れることができた。これは自分の予想よりも早く、適応力がある方なのかもしれないと思い、また人と交流するのがすきだという新しい自分を発見できたように思った。
- ② 昨年提出した留学志望動機にも書いたが、国際交流は幅広くとらえるべきものだと思えてきた。難しいことや大変なことをすることだけが国際交流ではない。一人でも多くの外国人と知り合い、新しい価値観を知るとともに、日本のことをもっと知ってもらうこと、それが国際交流の第一歩なのではないかと思った。
- ③ 留学中、何度も日本について様々な質問をされたが、実際それらは自分が普段何気なく過ごしている中では見落していた部分であり、正確に答えることができず、歯がゆい思いをした。日本人が見る日本と、外国から見た日本はことも違うのかと身をもって実感した。また、シンガポールでは主に年配の方の間でいまだに反日感情が残っており、まだ戦争問題は解決していないことを知った。さらに Japan and Singapore

の授業において、戦後の日本がアジアにおいて果たした役割を知ることができた。

- ④ 語学力がどこまで向上したのかということは、客観的には今後様々な指標を用いて測定することができるかと思うが、主観的には友達や先生方との日常会話を楽しみ、授業の予習課題であるリーディングを読むスピードが明らかに上がり、授業の聞き取りとノートテイキングが以前より楽に行えるようになったこと、などから向上したことは明らかである。しかし、最も大きな成長は「伝えようという努力をするようになったこと」である。長期間滞在するうちに、一つの事を伝えるときに使うことのできるアプローチの種類を増やすことができ、結果、すぐには伝わらずとも、様々な方法を使ってあきらめずに相手の自分の意思を伝えられるようになり、その大切さを知ることができた。

## ●アドバイス

- ・少しでも留学に興味をもっているのであれば、短期留学などになるべく早い段階で参加し、自分の中の「留学」に対する考え方を明確にできればよいと思う。短期留学での経験はもちろんのこと、それとともに参加した友達や先輩とも留学について話し合えるとより考えが深まるように思う。
- ・そのうえで、留学することを決めたのなら、とにかく早い段階から情報を集めること、語学試験の準備をきちんと行ったうえで受験すること、そして出願期間が春休みなので書類は早めに準備することを強くすすめる。
- ・どこの地域、どこの大学に行くかを決めるとき、自分のイメージだけで決めないようにしたほうがよいと思う。実際にそこへ行った先輩方にお話を聞いたり、いろんなところから情報を得たうえで、半年もしくは1年かける価値のある、本当に自分のしたいことができるところへ行かうようにするべきだと思う。
- ・留学中は1日1つ目標を立て、それをこなせるようにすると毎日が有意義に過ごせると思う。留学生である以上、やはり勉強をおろそかにしては意味がないし、また多くの人々と交流するのも大事なことの1つであるから、両方をうまくこなせるように心がければよいと思う。



From Samurai to Sony テスト終了後、先生と友達と



University Town 内のプールから、UTown Residence (写真左側の建物) を見る





人間・環境学研究科 共生人間学専攻 博士後期 3年 中岡 翔子

留学先大学 ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン (The Ludwig Maximilian University of Munich) 【ドイツ】

学部・学科 Germanistik

留学期間 平成 24 年 9 月 1 日～平成 25 年 8 月 31 日 (12 か月)

まず学習面に関して、ミュンヘン大学に入学してる間、私は博士論文のための資料集めと学術面での語学力を上げることを目標としていた。2012年9月1日に渡独し、秋学期が始まるまでミュンヘン大学が行っている入学準備コースに通っていた。週5日、朝9時から13時までの入学準備コースでは、大学の授業を受ける際に必要となる文章の書き方や研究発表の方法を中心に学んだ。10月から始まる秋学期では、『文学理論』と『ゲーテの時代』という講義をとりつつ、大学での語学の授業に週2日にペースで通った。春学期は、午前中に週5日語学の授業を受け、午後には『魔の山』と『アドルノと文学』の演習に出席した。『文学理論』の講義では、シュライエルマッハーやディルタイの古典に始まり、デリダの脱構築とその後を体系的に学び、大変勉強になった。演習はどちらも、毎回テーマに沿って資料が配布され、その内容をその時の発表者がまとめ、参加者全員で議論する形式であった。また大学の図書館もバイエルンの州立図書館も資料が充実しており、交通の便も良く頻繁に利用した。出発前の準備としては、病院での健康診断書を事前にミュンヘン大学に送った。航空券は、ルフトハンザにて一年間有効のオープン券を購入したのと、ビザが現地でスムーズに受け取れるようにとドイツ大使館で経費負担誓約書を発行してもらった。経費負担誓約書は私の場合は必要なかったが、念のために用意しておく方が良い。ドイツでは入国後1週間以内に住民票を登録しなければならず、また保険の加入や種々の手続きで到着直後は慌ただしいが、入学準備コースでそれらの諸手続きについても指導があった。またミュンヘン大学にはBuddyプログラムがあり、希望者にミュンヘン大学の学生を紹介してくれる。私のBuddyになった学生は、空港に着いたところから迎えに来てくれるなど生活面でさまざまなサポートをしてくれたので心強かった。生活面では大学側が用意してくれた学生寮に入ることができ、物価の高いミュンヘンにおいて月300€(光熱費インターネット込)で家賃がすんだことは大変助かった。ただ、私が住んでいたところは新築だったので、衛生面で気になることはなかったが、古くからある学生寮は前の住人によっては部屋の状態が良くないこともあるようだ。部屋には小さなキッチンとシャワー、トイレがあり、ベッドと勉強机、椅子も用意されていた。食器や電気スタンドなどの生活用品は入れ替わり立ち代りする日本人留学生の間でまわっているので、買わずにすんだ。私が一番困ったことは、ドイツに向かう飛行機の中で歯の詰め物がとれたことであった。渡航の前々日に歯医者に行っていただけに予期しない事件であった。幸いBuddyプログラムの学生が歯医者の予約をすぐにとってくれたが、日本で入ってきた旅行保険には歯の治療費は含まれておらず、ドイツの保険にも加入していない、まして異国の地とあってたいへん不安な気持ちで歯医者に向かった。ミュンヘンの歯医者で新たに詰め物をしてかかった治療費は診察料なども込みで210€程度だった。こうした日常での様々なハプニングや、授業で知り合った人々などを通して、当初目標としていた語学力の向上が達成された。



文学研究科 美学美術史学 2回生 浅井 佑太

留学先大学 ハイデルベルク大学 (Heidelberg University) 【ドイツ】

学部・学科 音楽学

留学期間 平成 24 年 9 月 1 日～平成 25 年 9 月 2 日 (6 か月)

## 研究・学習成果の概要

ハイデルベルク大学で入手可能な資料を基にして、現在の自身の課題であるシェーンベルクにおける表現主義時代から 12 音技法にいたるまでの作曲上の変遷についての研究を行った。その際、シェーンベルクの音楽的思考の中で 4 度和声が中心的な役割を果たしており、楽曲内においても 4 度和声の独立性や、扱いに大きな差異があり、ここに表現主義時代の特徴を定めることが可能であると私は推測している。たとえば Kammer symphonie Nr. 1 op. 9 では第三小節に現れる 4 度音程のモチーフは、楽曲内での構造的な機能を確かにになっているものの、最終的には E-dur に解決され、ここではシェーンベルクが自身の「Harmonielehre」で示しているように、4 度和声は伝統的な和声法の中で理解することができ（例えば、第五度音を上方変異した属和音）、楽曲内部でも偶成和音的な現れ方をしている。しかし op. 15 のような歌曲では、すでに 4 度和声は独立した和音として扱われ、解決の必要性を持たないものへと発展している。一方で op. 11.1 のピアノ曲では、調的なストラクチャと明らかに対立する形で 4 度音程が用いられており、（あるいは op. 19 では三全音が 3 度を基底としたモチーフと鋭く対立している）、ここに表現主義時代のシェーンベルクの特徴を定めることができるだろう。一方最初期の 12 音技法の楽曲である、op. 26 では、4 度和声はストラクチャの中で、むしろ伝統的な調性音楽を思い起こすような作用をし、それが逆にこの和声に楽曲構造をつかさどるような役割を与えているといえる。こうした研究内容から、シェーンベルクの音楽の発展において 4 度和声がつかさどる役割が明確に浮かび上がることになるのである。

## 出発前の各種手続き、準備

特になし。交換留学生の規定通りの書類を提出したのみ。現地にはパスポートと最低限の衣類と必要な書類以外は持っていかず、後は全て現地調達した。

## 寮生活、その他生活

大学の用意した寮で生活した。非常に楽しく、ドイツ語の勉強にもなった。

## 留学中の問題点・困難な点

こうしたわずらわしい書類に余計な時間をさかなければならないことを除いては、特になかった。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

非常に充実した留学生活であった。留学中の研究の成果は、7月にポーランドで行われる国際美学学会で発表する予定である。留学する人へのアドバイスとして一点だけ述べるならば、過去の留学生からのアドバイスというのは往々にしてあてはまらないものであり、無暗に信用しないほうがよいということである。結局のところ、現地での生活での情報はすべて、現地で自分で集める他ない。



留学先大学 ライデン大学 (Leiden University) 【オランダ】

学部・学科 人文学部オランダ学科

留学期間 平成 24 年 9 月 1 日～平成 25 年 6 月 30 日 (10 か月)

## 研究・学習成果の概要

前回4年前の私費留学では、オランダ学の1年生用に当たる科目を履修し、今回はその続きに当たる主に2年生用の授業を履修することができた。オランダ史やオランダ語史、オランダ文学史、オランダ語学といった、ライデン大学オランダ学科ならではの、オランダに関する授業を受け、オランダに関する基礎的な知識を身につけることができた。特にオランダ語学は日本で学んでいた言語学のうちの基礎的な知識について、オランダ語ではどのように説明されるか、どのように教えられか、その注目点の違いが興味深かった。学生それぞれの母語について言語学的に説明する機会が多く、ヨーロッパの学生が大多数を占める中で、自分の母語である日本語について話し、他の参加者に理解してもらうことを通じて、自分自身の日本語学の理解度を確認し、説明する力がついた。どの授業も毎回読み物があったり、小テストがあったりして、そういったノルマを課されることで、日本ではなかなか時間のとれなかった、集中してオランダ語で読んで書く習慣が付き、語学力のアップに大きく役立った。

研究に関しては、前期は授業に慣れることで精いっぱいであまり手が回らなかった。後期からは授業の準備と研究にかける時間にメリハリをつけ、大学の付属図書館の資料を利用しながら、指導教員の先生に定期的にレポートを送っていた。日本ではなかなか手に入らないオランダ語の資料が容易に手に入ることで、また何より日常的にオランダ語を使う環境に身を置くことで、研究に必要な視点や考え方を養うことができた。修士論文完成に向けて、オランダでの1年間の経験を最大限生かしていきたい。

## 出発前の各種手続き、準備

市役所での住民登録のために、公認翻訳者による住民票の翻訳とアポストイーユが必要。オランダに入ってからでも依頼できるが、日本で準備しておくほうが早い。自分で翻訳したものは不可。

## 留学中の問題点・困難な点

オランダの場合は交換留学であっても学生ビザの要件として、学期末の試験を受け、単位を取ることが要求される(1学期に12単位、通常の授業3つ分)。修士課程の学生にとって、慣れない環境の中で、授業や試験の準備のために研究にさける時間が減ることはあらかじめ頭に入れておいたほうがよい。私の場合、前期は言われた通り授業と試験を受けたが、後期はさすがに論文にできるだけ多くの時間を使いたかったため、留学生コーディネ

ネーターに相談して試験を免除してもらった。最終的に言い分は通ったが、修士で留学する人は、日常の授業の準備や記述中心の試験のための勉強に時間を取られすぎないための、語学力や前知識が十分にあるかを自問し、論文に影響が出ないかどうか、出願前によく考えたほうがいい。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

留学当初は、大学の授業に慣れてきた後期に、修士課程に相当する授業を履修しようと考えていたが、結局やめた。修士課程の授業では、毎週、ディスカッションやプレゼンテーションなどが行われるため、授業にしっかりついて行くためには、かなりの準備と会話力が必要になる。学部の授業であっても、オランダ学科の場合は、自国の大学でオランダ学を専門にしている学生が多く、すでに母語で授業に必要な知識を持っている人が多い。日本人の学生にとっては、語学的にも知識的にも、ついていくのは楽ではない。しかし、留学生活を通して、オランダ語で学術書を読んだり、自分の専門について学んだり、行く前よりも語学力や思考力といった力がかなりついたことを実感している。アドバイスは上に記したとおり。





情報学 研究科 社会情報学 1 回生 谷澤 亮也

留学先大学 グアダハラ大学 (University of Guadalajara) 【メキシコ】

学部・学科 修士課程 レスキューコース

留学期間 平成 24 年 8 月 15 日～平成 25 年 1 月 7 日（5 か月）

私は京都大学大学院、情報学研究科、社会情報学専攻一回生の谷澤亮也です。研究は津波防災を社会学、自然科学の両面からみた研究をしています。具体的には、高知県の極めて津波の危険性が高いエリアでアンケート調査を実施し、その結果をもとに講演会を行ったり、個別の避難訓練を実施したりしています。

私はメキシコのグアダハラ大学に平成 24 年の 8 月から平成 25 年の 1 月まで 5 ヶ月間留学していました。

## 研究・学習成果の概要

私の将来の夢は、国連や JICA などの国際的な機関で防災の活動、研究などに従事することなので、今回地震災害が多くさらに、スペイン語圏であるメキシコを選びました。

出発する前のプランでは、スペイン語を最初の 3～4 ヶ月勉強してから、最後の 1～2 ヶ月で研究する予定だったのですが、スペイン語の能力が思うように伸びず、結局 5 ヶ月全てをスペイン語の勉強に費やしてしまいました。

僕がいたグアダハラ大学の CUSUR というキャンパスでは、スペイン語の授業が開講されていなかったのですが、外国語を個人で勉強するためのセンターにいた 1 人の先生に頼み、平日毎日 1 時間弱スペイン語を教えてもらいました。さらに日本語を学びたいという学生に私が日本語を教え、その代わりに私も彼からスペイン語を週 2 回学んでいました。その他にももちろん日本から持っていたたくさんの参考書を毎日 3～5 時間は欠かさず自習しました。メキシコ人は大抵むこうから話かけてくれるので友達をつくるのも苦労は無く、会話する機会も多かったです。ほとんどスペイン語を知らずにメキシコに行きましたが、帰国前には日常会話、1 人での旅行はできるようになり、簡単なニュースや映画も理解することができました。

メキシコの学習の成果を具体的に表することは難しいですが、卒業前に DELE（外国語としてのスペイン語検定試験 スペイン文部省認定証）の B2 レベル（専門用語を必要としない一般的な会話において、状況に適した対応をするのに十分なスペイン語能力を証明する。）を取得したいと思っています。

## 出発前の各種手続き、準備

飛行機をおよそ 2 ヶ月前に予約しました。ホームステイ先はグアダハラ大学の大学に紹介してもらえたので、すぐに見つかりました。ビザも 6 ヶ月以下の滞在なら必要ないので問題ありませんでした。

## 当初の目標と達成度、これから留学する人へのアドバイス

研究はほとんど何もできませんでした。スペイン語の能力だけをみると、目標にはとどきませんでした。毎日勉強をして、それなりの成果がでたので満足です。何よりメキシコにほとんどスペイン語を知らずに行って、5ヶ月生活して、友達も作って帰って来れたので自信になりました。

日本のお土産を持って行ったり、日本食をつくってあげたら喜ばれると思います。たまに日本の本が読みたくなるので持っていった方がいいかもしれません。メキシコにはドライヤーを使う習慣がないのか、ショッピングモールなどでもあまり売っていなかった。メキシコへ行く人は持って行った方がいいかもしれません。

主に語学力の低さから多くの人に迷惑をかけた留学でしたが、一番言いたい事は「若い時の苦労は買ってでもせよ」ということです。私はメキシコを選んだことを全く後悔していません。行って良かったと思っています。苦労したいならメキシコでスペイン語を学ぶ生活をおすすめします。

## 京都大学国際交流推進機構

交換留学海外派遣報告書 平成 25 年度版

平成 26 年 3 月発行

編集・発行 京都大学国際交流推進機構

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

Tel. 075-753-2561

<http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/docs/center.html>

印刷 株式会社 田中プリント



